

(1) 縄文時代の土器

森の木遺跡から出土した縄文土器は、表採を含め破片総数で615点にのぼった。そのほとんどが、縄文時代早期に属している。その土器を文様や形態を中心に以下のように分類し、報告する。

I類 押型文土器

A類 山形押型文 (第26図)

B類 楕円押型文 (第27図・第28図1)

II類 その他の有文土器

A類 刺突文 (第28図2)

B類 撚糸文 (第28図3～7)

C類 隆帯文 (第28図8)

III類 無文土器

A類 条痕文 (第28図9～22)

B類 薄手無文 (第29図1～11)

C類 厚手無文 (第29図12～24)

D類 底部 (第29図25・26)

表2 縄文早期土器文様別出土点数

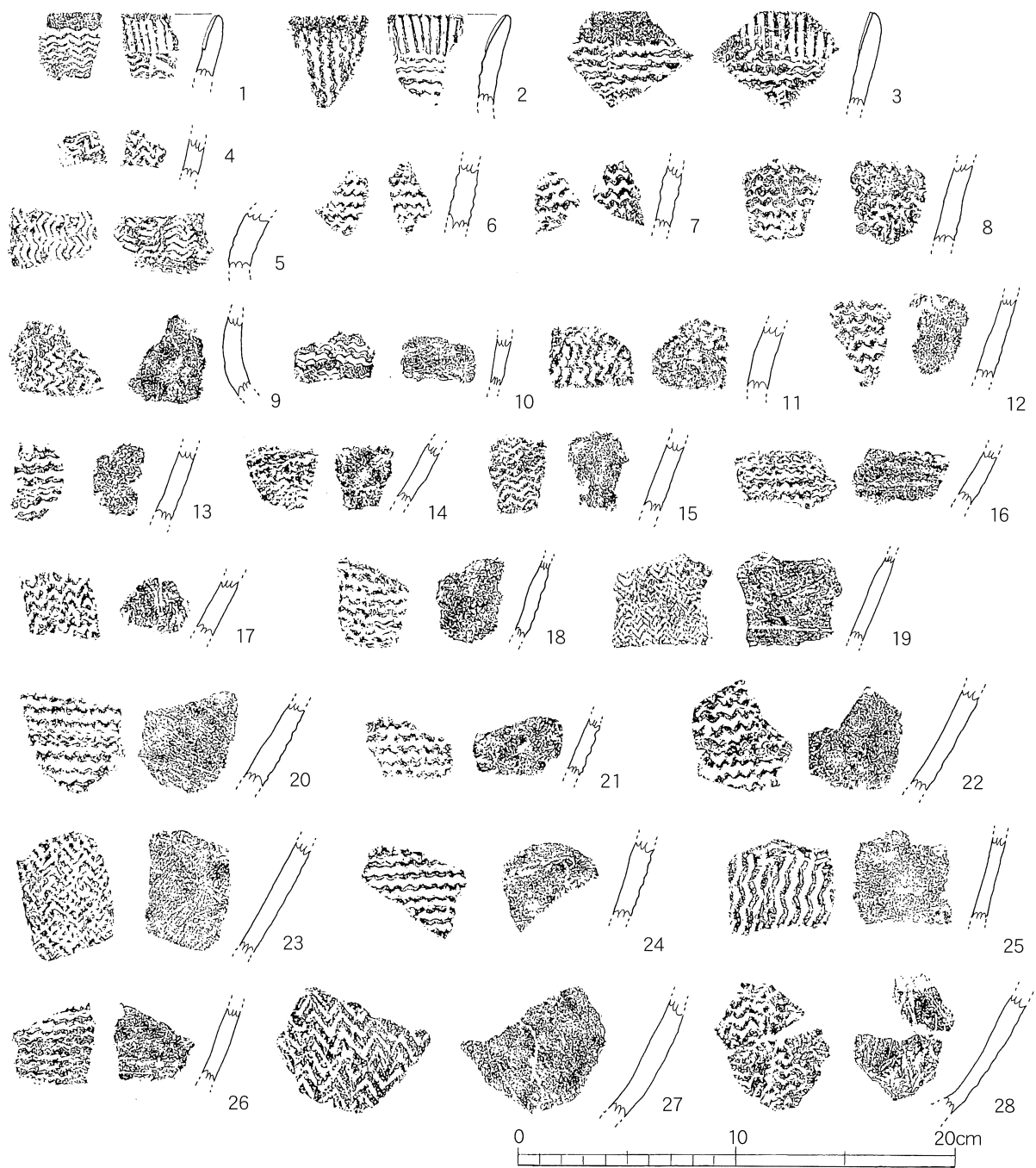
	有 文					無 文 (条痕文を含む)
	押 型 文		撚糸文	刺突文	隆帯文	
	山形文	楕円文				
口縁部	4	4				4 4
胴 部	45	36	5	1	1	4 7 3
底 部						2
計	49	40	5	1	1	5 1 9
百分率	8.0	7.0	1.0			8 4 %
	1 6 %					
総 計	6 1 5					

I類は押型文土器で、総数89点が出土している。押型文土器は山形押型文と楕円押型文があり、前者をIA類とし、後者をIB類とする。IA類は49点が認められ、この内、口縁部が4点、口縁部近くの内面に山形文があるものが6点出土しており、残りは胴部の破片である。

1～3は、口縁部である。口縁部外面の山形文は、1・3が横方向で、口唇部付近に無文帯がある。3の山形文には、文様の重なった部分が認められる。内面は、山形文を施文し、その後原体条痕を加えている。2は縦方向の山形文で、口径は小さい。内面はいずれも原体条痕があり、その下位には横方向の山形文が施文されている。色調は、1が暗褐色、2・3が明褐色で胎土に1は白色粒、2はさらに石英粒や斜長石が認められる。

4～8は、比較的口縁部に近い部位で、内外面に山形文が施文されている。5以外は、内外面とも横方向の山形文であるが、5は、口縁部が外反し、内面は横方向、外面は縦方向に山形文が施文されている色調は、5が明褐色であるが、他は茶褐色である。また、5以外の胎土には、角閃石や斜長石が認められるが、5には石英が多く含まれる。

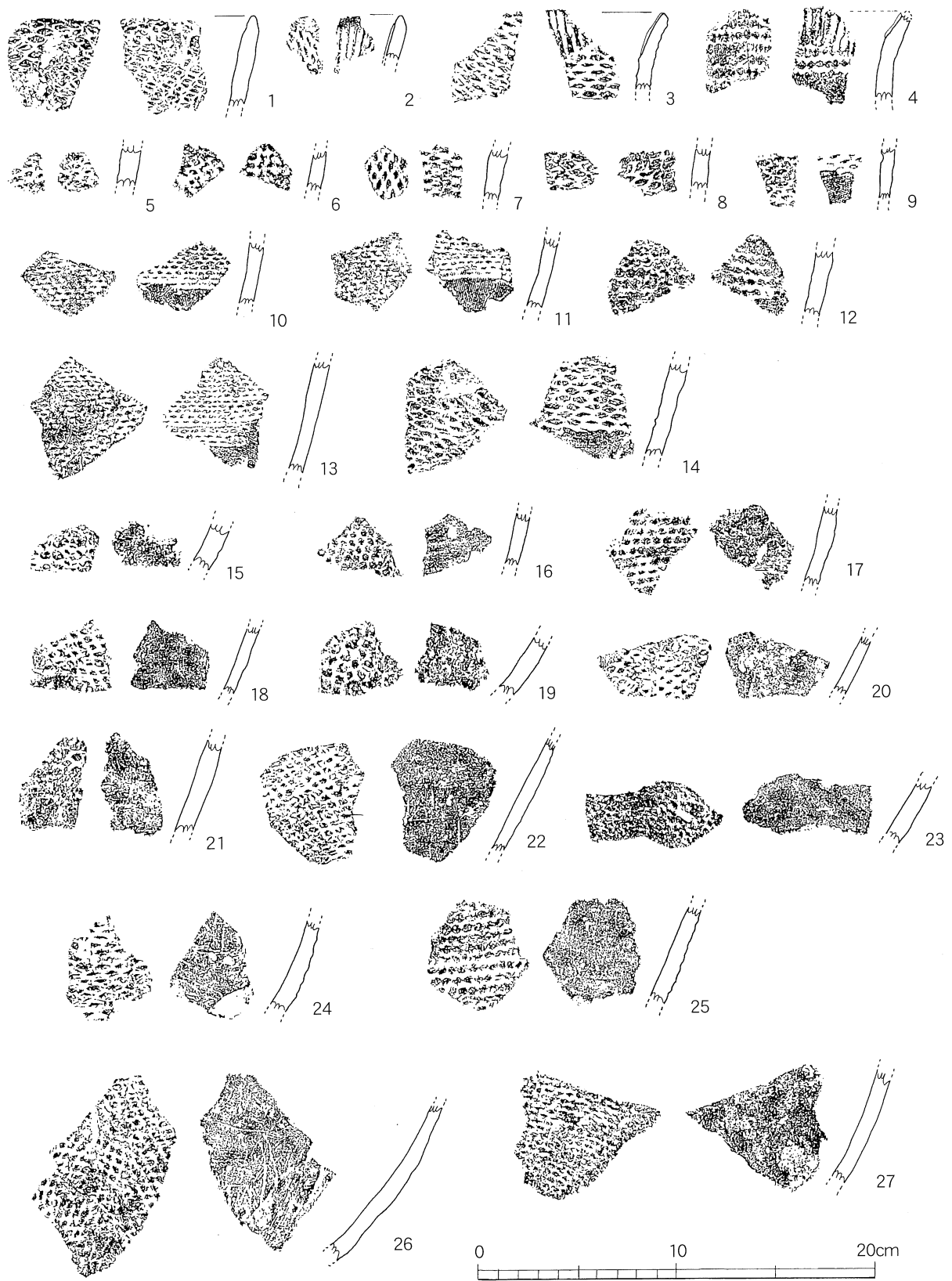
9～28は胴部の破片である。外面は山形文が施文されているが、内面は撫でにより調整されている。9は、外面に縦方向の山形文が施文され、口径や土器の湾曲から、壺状になる可能性が強い。茶褐色で斜長石や角閃石を含む。10は小破片であるが、他の資料に比較すると山形の間隔が広い。明褐色で角閃石を含む。11は外面に縦方向の山形文が施文されているが、内面は摩滅している。茶褐色をし、角閃石や金色の雲母を含む。12・13・14は茶褐色で、12・14は角閃石、13は斜長石が認められる。15は内面が黄褐色、外面が赤褐色で、角閃石を含む。16は、茶褐色で角閃石・斜長石を含む。17は茶褐色で角閃石や白色粒が認められる。18は、明褐色で石英粒を含む。19は、茶褐色で角閃石・斜長石・白色粒を含む。20は、明褐色で角閃石・斜長石を含む。21・22・23・24は、茶褐色で21は角閃石・斜長石・白色粒を含み、22は、角閃石・砂粒、23・24は角閃石・斜長石が認められる。25は、縦方向の大形の山形文が施文されている。表土からの出土で、茶褐色をし、角閃石・石英を含む。26は、茶褐色で角閃石・斜長石・石英を含む。27・28は、底部近くの破片である。27は、明褐色で角閃石・斜長石を含む。28は茶褐色で角閃石が認められる。



第26図 森の木遺跡出土縄文土器実測図（1）

IB類（第27図）の楕円文は40点が出土している。このうち口縁部が4点、内面にも押型文がみられる口縁部近くの資料が11点で、残り25点はその下位の胴部の資料である。

1の口縁部の資料は、内外面に重複した乱雑な楕円文のみが施文されており、原体条痕は認められない。一部器面が剥落した部分から、胎土には植物繊維質状の圧痕が観察できる。2は、口縁部外面に縦方向の楕円文が施文され、内面には原体条痕が見られる。赤褐色で、胎土に白色粒を含む。3は、外面に斜め方向の一部重複した楕円文が、内面には横方向の楕円文を施文し、その後、上位に原体条痕が加えられている。原体条痕は、2段に渡り施文されている。そのため口縁端部が、他に比較するとやや外反する。色調は茶褐色で胎土に白色粒を含む。4は、口縁端部をわずかに欠く。茶褐色で、角閃石と石英を含む。



第27図 森の木遺跡出土縄文土器実測図（2）

5～8は、内外面に楕円文が観察される小破片である。5・6は、茶褐色で角閃石を含む。7は、外面が縦方向の楕円文である。茶褐色で斜長石が胎土に認められる。8は茶褐色で、胎土に石英を含む。

9～14は、内面の下位が無文部になることが判る資料である。9・10・11の色調は、茶褐色で9は胎土に角閃石・斜長石を含み、10・11は、白色粒を多く含む。12は比較的口径の小さい土器で、胎土に角閃石・斜長石を含む。13は、内面の楕円文が数段にわたり施文され、最下位は途中で終わっている。茶褐色で、胎土に白色粒を多く含む。14の外面は、やや斜め方向の乱雑な楕円文が施文されている。茶褐色で胎土に角閃石・斜長石を含む。15～27は胴部の資料である。器面調整は、外面に楕円文が施文され、内面は撫で仕上げである。15・16の色調は茶褐色で、15の胎土には石英粒を含み、16は角閃石・斜長石を含む。17は、明褐色で、角閃石を含む。18・19の色調は、明褐色で、18の胎土には斜長石が認められ、底部に近い19の胎土には、石英が含まれる。20は、茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。21は、楕円文が認められるものの、下位は撫で消されている部分もある。赤褐色で、白色粒を含む。22は、明褐色で、角閃石・斜長石を含む。23は赤褐色で、白色粒を多く含む。24は、明褐色で、角閃石・斜長石を含む。25は白茶色で、胎土に角閃石・斜長石・石英を含む。26は、底部に近い資料である。赤褐色で、角閃石・斜長石を含む。27は、赤褐色で、角閃石・斜長石・石英を含み、白色粒の多さも目立つ。

第28図1の屈曲する口縁部の資料は、摩滅しているが、内面に原体条痕があり、外面にも楕円文と見られる文様がある。他の押型文土器とは器形が異なる。黄褐色で、胎土に白色粒を多く含む。

Ⅱ類は、刺突文・撚糸文・隆帯文で、それぞれA・B・Cと小分類をおこなった。

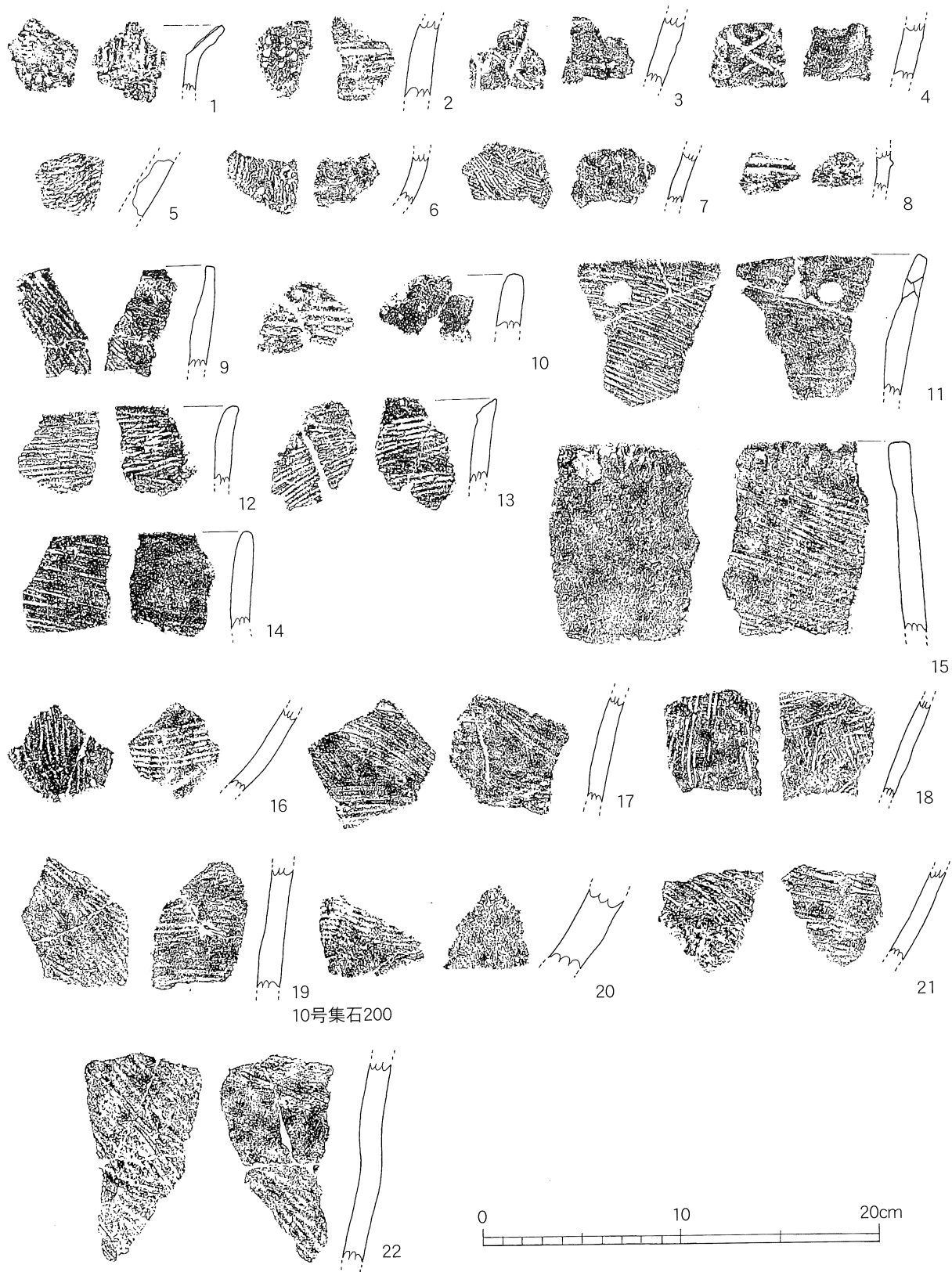
Ⅱ-A類（第28図2）は、器壁が厚く、比較的口径部に近い資料である。外面に浅い刺突が観察される。内面は横方向の条痕がある。茶褐色で、胎土に砂粒・石英粒を含む。

第28図3～7は、Ⅱ-B類で、撚糸文である。この5点の内、3・4は、格子状に撚糸文が施文されている。器壁は厚く、色調は茶褐色をしている。3の胎土には、角閃石・石英が認められる。5～7は、前者に比較すると器壁が薄く、撚糸は、細く、間隔も狭く、平行に施文されている。これらは、同一個体の可能性が強く、色調も茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。

Ⅱ-C類（第28図8）は、器面に細い粘土紐を貼りつけた隆帯文である。器面は撫で仕上げで、暗茶褐色をし、角閃石を含む。アカホヤからの出土で、縄文時代前期の轟B式土器の可能性が高い。

Ⅲ類は条痕文土器を含む無文土器である。条痕文土器は、器面調整のため、撫で消されている場合も多く、一部は第29図18のように、条痕地が観察されるものもある。その一方第28図9～22のように、条痕がそのまま残されているものもある。さらに、無文土器の中には、これまで、早水台遺跡や稲荷山遺跡の報告書で、分類されているように、器壁の薄いものと、厚いものがある。もちろん中には、両者の中間的なものもあり、全てを明確に区分することは困難である。しかし、前者は比較的作りが丁寧で、器壁が薄く、器形も小さめである。後者は、胎土も粗く、器形も大きく、器壁も厚い特徴を持つ。

Ⅲ-A類（第28図9～22）は、先に述べたように、明瞭に条痕が器面に残されているものを抽出した。9は、内外面とも、斜め方向の条痕で、内面はさらに撫でている。明茶色で、角閃石・斜長石を含む。



第28図 森の木遺跡出土縄文土器実測図（3）

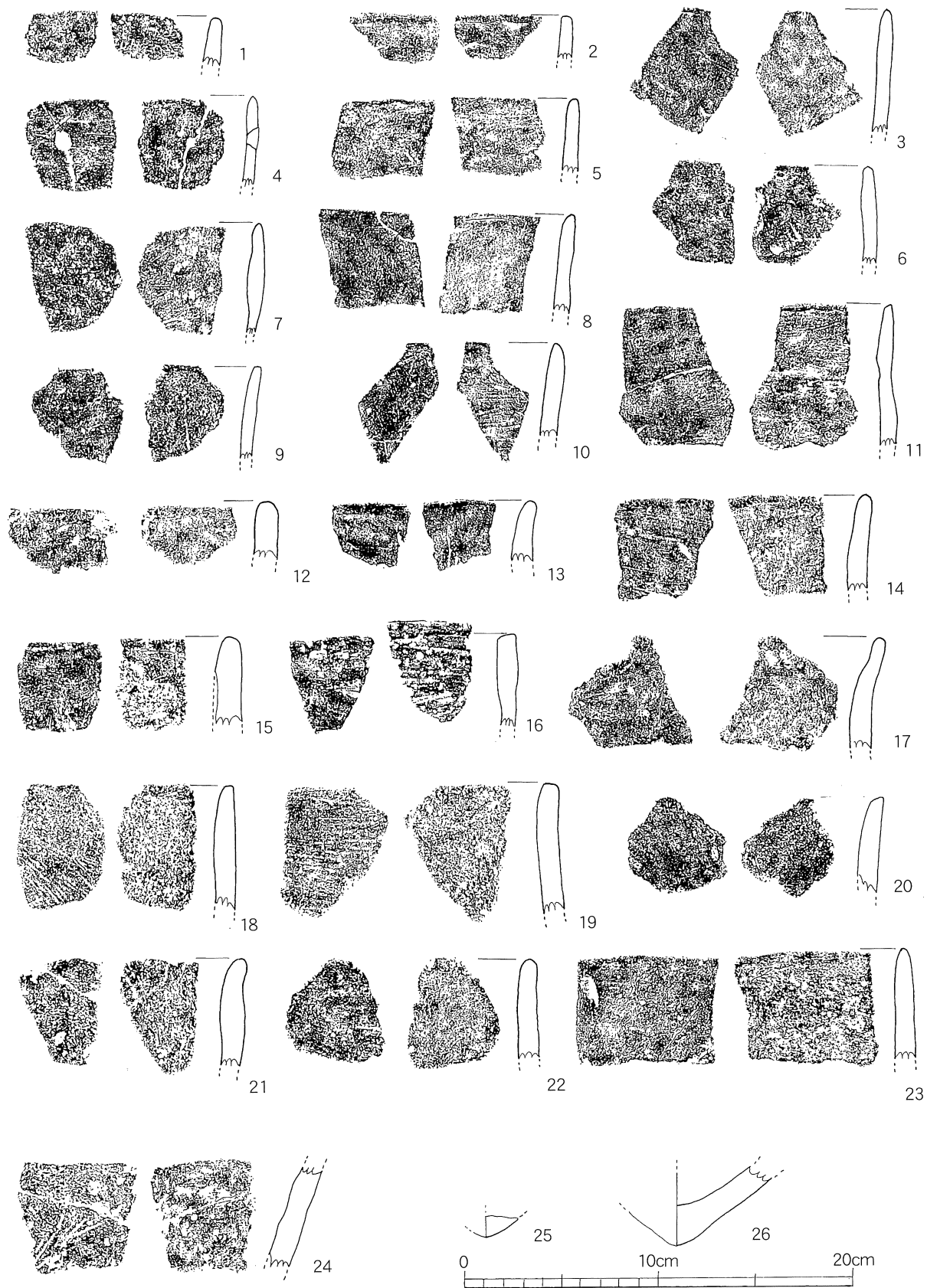
10は、器壁の厚い土器である。外面には粗い条痕が残されているが、内面は撫で仕上げである。黒褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。11は、外面に斜め方向、内面には横方向の条痕が見られ、内面はさらに撫で調整が加えられている。また、器面には内外面の両方向から抉られた穿孔がある。色調は、茶褐色で、胎土には角閃石・斜長石・石英を含む。12は、内外面とも横方向の条痕で、色調は茶褐色をし、角閃石・斜長石を含む。13は、外面が斜め、内面が横の条痕で、口縁端部は尖る。茶褐色で、胎土には白色粒が目立つ。14は、内外面とも横方向の条痕の後、両面とも撫で消されている。色調は茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。15は、撫で調整のためか、内面の口縁部下位にのみ斜め方向の条痕が認められる。色調は、茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石・石英を含む。

16～22は条痕が明瞭に認められる胴部の資料である。16は底部に近い資料と考えられる。内面は横方向、外面は縦方向の条痕で、色調は明褐色で、角閃石を含む。17は、内外面とも方向性のない条痕の後、撫でられている。色調は明褐色で、角閃石・斜長石を含む。18は、比較的器壁が薄く、焼成も硬い。器面は内面が多方向、外面が縦方向の条痕で、さらに撫でが加えられている。明褐色で、角閃石を含む。19は、10号集石周辺出土で、外面は斜め、内面は横方向の条痕で、さらに両面とも撫でられている。茶褐色で胎土に角閃石・斜長石を含む。20は、底部に近い器壁の厚い資料で、内面は撫でてあるが、外面は条痕の後、撫でられている。明茶褐色で、角閃石・斜長石を含む。21は、内面は横方向、外面が斜め方向の条痕で、さらに撫でが加えられている。明褐色で、砂粒を含み、内面にはススも付着する。22は、胴部が緩く屈曲する。内外面とも斜め方向の条痕で、内面はさらに撫でられている。黒褐色で、角閃石・斜長石を含む。

Ⅲ-B類（第29図1～11）は、無文土器の薄手で、器壁の厚さは1cmに満たない。器面はすべて撫で仕上げである。1は、赤褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。2は器面にススが付着する。色調は明褐色で、角閃石を含む。3は、茶褐色で、角閃石・斜長石を含む。4は、器壁に外側からの穿孔が穿たれている。色調は明褐色で、胎土には角閃石・斜長石を含む。5は、器面にススが付着している。暗褐色で、角閃石・斜長石を含む。6は内面に条痕を撫で消した痕跡が観察できる。色調は明褐色で、角閃石・斜長石を含む。7・8・9は、茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。10は内面に条痕を撫で消した痕跡が認められる。色調は茶褐色で、角閃石・斜長石を含む。11は、茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。

Ⅲ-C類（第29図12～24）は、器壁の厚さが、1cm以上ある。器面調整は内外面とも撫で仕上げである。12・13・14は、胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は12・13が茶褐色で、14は灰褐色である。15は内面が剥落しているが、色調は茶褐色で、角閃石・斜長石を含む。16の内面は、篋状の工具で撫でられている。色調は明褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。17は、口縁部が緩く外反する。色調は、暗褐色で、胎土に角閃石が多く含まれる。18・19の外面には条痕の痕跡が認められる。色調は暗褐色で、胎土に角閃石・斜長石・石英を含む。20の色調は、暗褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。21の器面は摩滅している。色調は茶褐色で、胎土に角閃石を含む。22・23・24は、茶褐色を呈し、角閃石・斜長石・砂粒を含む。24には、白色粒も目立つ。

Ⅲ-D類（第29図25・26）として底部を区分する。明確な底部は2点出土している。25は、尖底部の先端部のみの小破片である。明褐色をし、白色粒を含む。Ⅲ-A類の底部の可能性が強い。26は内外面とも撫で仕上げである。色調は茶褐色をし、胎土に角閃石・斜長石・白色粒を含む。器壁の厚さや、大きさから推測すると、ⅢB類の底部の可能性が強い。



第29図 森の木遺跡出土縄文土器実測図（4）

(2) 縄文時代の石器

森の木遺跡の縄文時代早期の文化層及び集石遺構から出土した石器類は、礫器46点、敲石・磨石6点、石斧1点、砂岩製大型剥片石器24点、同石核2点、石鎌5点、スクレイパー類35点、石錐1点、彫器様石器3点、同石核18点である。

森の木遺跡の時期については、土器の項で詳述されているように、早期のほぼ一型式の範中でとらえられるものであり、時期的幅はかなり限定されたものと考えられる。その為、石器についても同一の文化期の所産と一括して扱うことにした。

礫器 (第30～34図)

礫器類は石器総数に比しても多く出土している。素材は全て遺跡の全面を流れる大越川の河床礫である砂岩の円礫・偏平礫・垂角礫が用いられている。ここでは、片刃礫器のⅠ類(第30～32図)と両刃礫器のⅡ類(第33、34図)に大別して観察した。

Ⅰ類はいわゆるチョッパー(Chopper)と呼ばれるもので、偏平円礫の一端の片面に加撃し刃部を形成しているものⅠ-A類(No.1～5、13・15)、大型礫を分割の後、片面加工したものⅠ-B類(No.20～23)、中型の偏平礫を分割後、片面加工したものⅠ-C類(No.7～9、12)、中型の垂角礫の一端を片面加工するとともに、両側に調整的加工をしたものⅠ-D類(No.10・11・14)に細分することもできる。

Ⅰ-A類は形態的には最も素朴な石器とされるもので、加工度が小さいものである。3については、他の端部に大きな剥離がみられるが、調整的なものであろう。13は極端に大型のもので剥離も大まかである。Ⅰ-B類は、とくに森の木遺跡の礫器を特徴づけるものといつてよいものである。21～23はいずれも一端の片面加工により鋭い石斧状の刃部を形成している。20は、一端を突出して尖鋭化したもので、その両側に細かい加工も施されている。Ⅰ-C類の中で、8は石材も緻密なもので、剥離は大きいにもかかわらず、鋭利に仕上げている。9はむしろ小さい突出部を作るような加工である。Ⅰ-D類のうち10は刃縁が内湾するように、11は逆に外湾するように加工されている。14については、刃部の幅が狭く仕上げられており、また細かい加工もなされている。これらはまた、重量についても傾向性がうかがわれる。すなわち、Ⅰ-A類は249gから2,430gまで大きな幅があるものの、Ⅰ-B類は全て1,500gを越える重いものであり、Ⅰ-C類は410～640g、Ⅰ-D類は579～768gとほぼまとまっている。

Ⅰ-C類、Ⅰ-D類の素材礫の分割と調整加工は、そこに形状の整形と重量の調整の意図が感じられる。Ⅰ-B類の大型礫器にしても、他の測辺、端部の加工がなされており、やはり同様の意図を汲みとることができる。また、Ⅰ-D類については、鋭い稜線を小さい打剥によって調整している。

Ⅱ類(第33、34図)は、いわゆるチョッピングツール(Chopping tool)と呼ばれるものを含む両刃の礫器類で、大型礫の一端を両面加工したものⅡ-A類(1～4)、垂角礫および分割礫の一端を両面加工したものⅡ-B類(5・7・8・13)、大型礫に不規則な両面加工を施し、一部を尖頭化したものⅡ-C類(6・11)と、彫器的な形態をもつⅡ-D類(9・10・14)に分けることができる。

Ⅱ-A類の1は偏平礫で重量も他より軽く、刃部の加工も繊細である。2、3、4はいずれも1kgを超える重量感をもつもので、2は意図的に交互剥離を行っている。3、4は刃部を1回の大きな打剥によって形成後、両端に比較的細かい剥離を行っている。なお、4の他の端部には著しい剥離と敲打痕が見られる。Ⅱ-B類の7、13については一側辺に交互剥離が施されており、とくに7のそれは細かい。Ⅱ-C類の6についてはとくに注目すべきことに、その尖頭部に使用による摩擦痕が見られる。6は重量も1.4kgを超え、Ⅱ-A類の3、4とほぼ同じ数値

である。周縁の加工は大まかである。

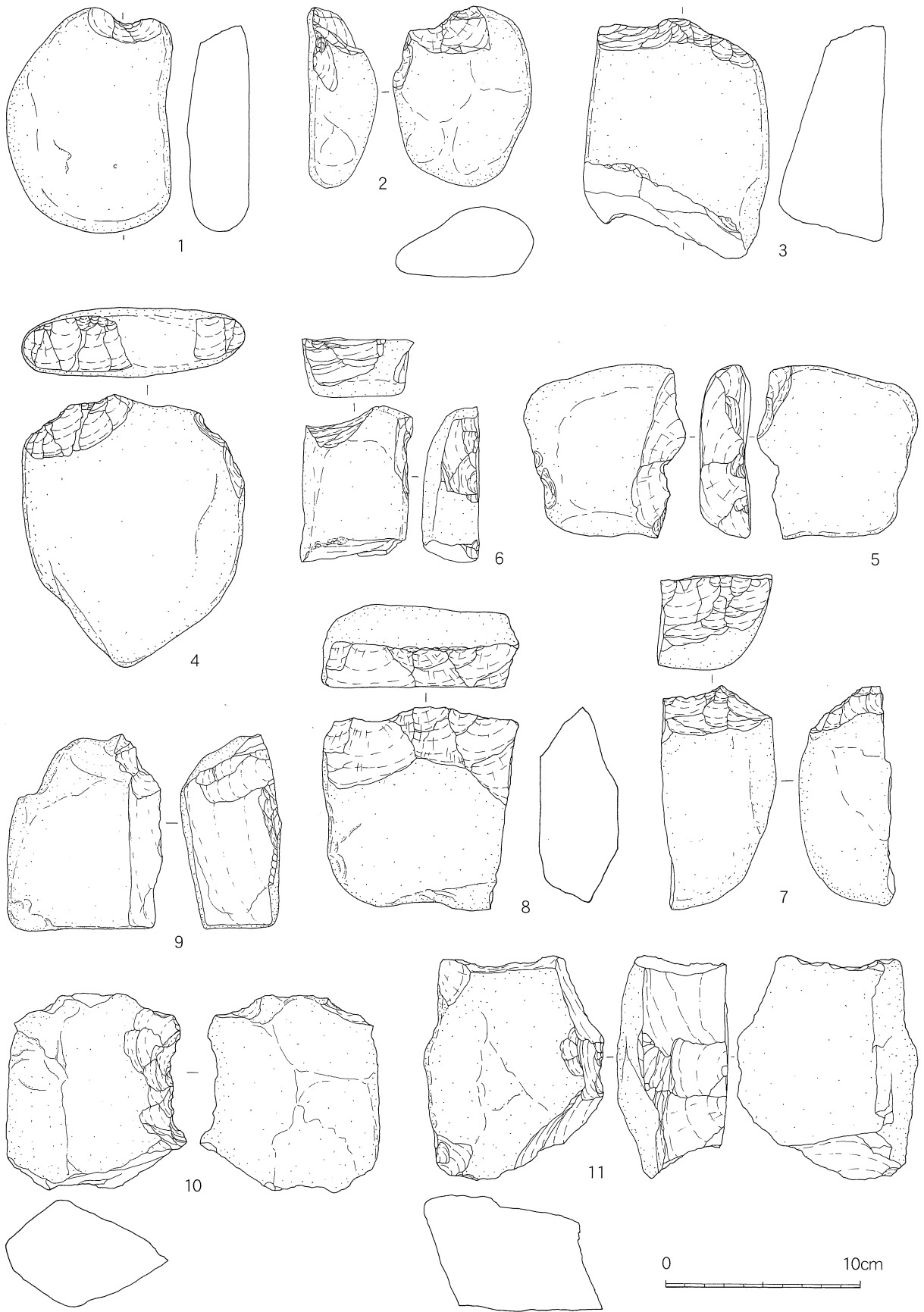
II-D類は彫器様礫器とも分類される、やや特殊な両刃加工が施されたものである。9は、小型の円礫を素材としたもので、当初石核として利用されたものとみられ、その後一端に彫器的な加工を施している。10は、分厚い扁平礫を截断するようにとり出し後、一端の斜め方向に大きな剥離を加え、その面から細かい加工を施して彫器的刃部を形成しているものである。14は、9・10とは少し異なるが、側辺の加工によって形成された面から端部に加工を行い、鋭角の刃部を作っている。

表3 森の木遺跡出土片刃礫器一覧

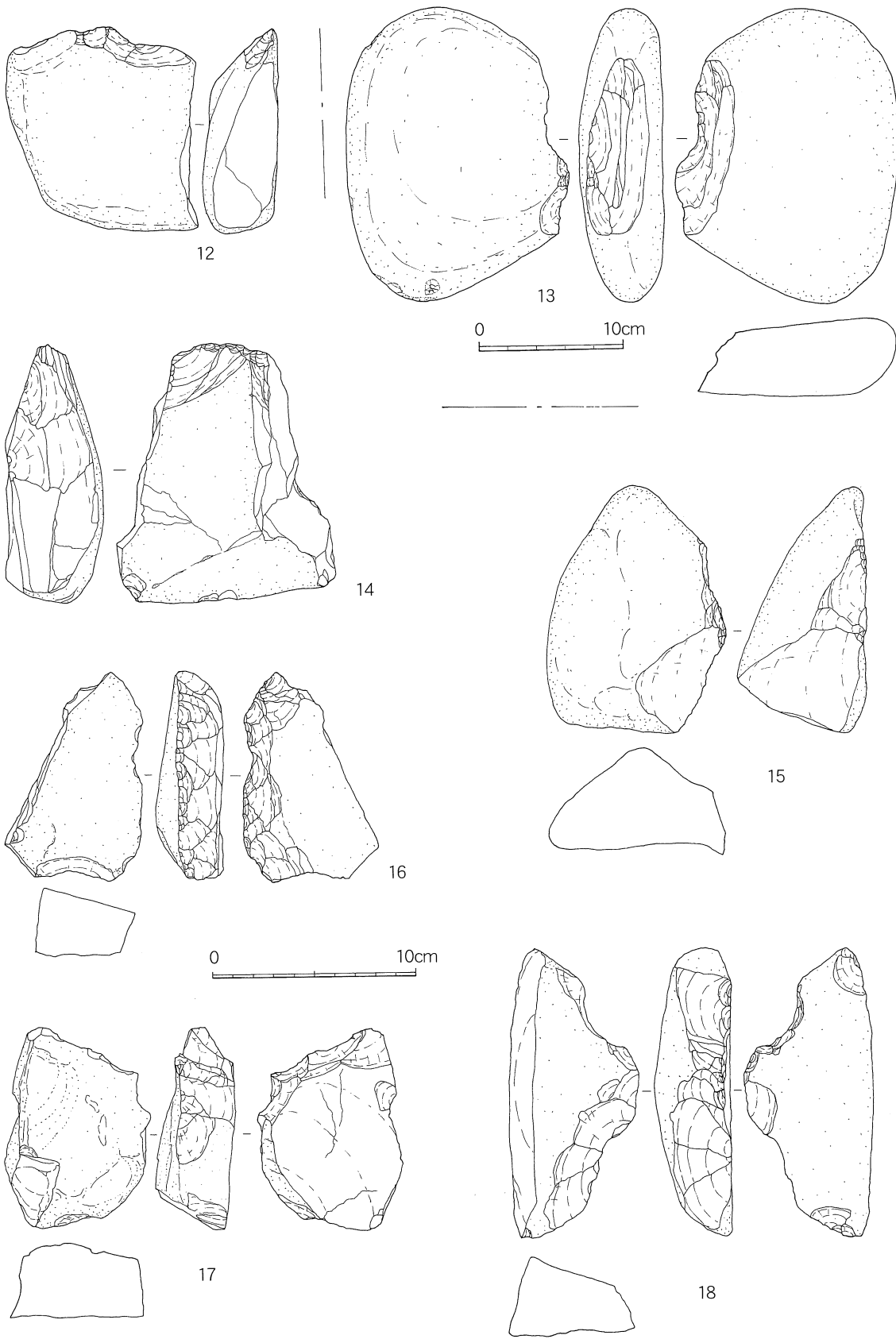
No	器種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	刃角
1	片刃礫器	4号集石-3	11.5	8.5	3.2	462	砂岩	円礫	70°
2	片刃礫器	B-6	9.3	7.1	3.5	268	砂岩	円礫	60°
3	片刃礫器	D-6	12.2	9.5	5.5	817	砂岩	両側に加工	75°
4	片刃礫器	E-6	13.9	11.4	3.5	762	砂岩	扁平円礫	70°
5	片刃礫器	6号集石	8.2	9	2.4	249	砂岩	扁平礫	55°
6	片刃礫器	6号集石	7.9	5.5	3	210	砂岩	角礫(分割)	85°
7	片刃礫器	B-7-2	11.4	5.9	4.8	410	砂岩	角礫(分割)	85°
8	片刃礫器	B-6	10.4	10.2	4.1	640	砂岩(良質)	刃縁は直線的	75°
9	片刃礫器	B-6-2	10	8	5.2	604	砂岩	一端を尖鋭化、角礫	80°
10	片刃礫器	E-6-3	9.3	10	5.5	579	砂岩	刃縁は内湾、調整打有	80°
11	片刃礫器	D-7	11.4	9.3	5.8	748	砂岩	角礫	70°
12	片刃礫器	D-6-2	10	9.3	3.7	459	砂岩	扁平礫	65°
13	片刃礫器	D-6-2	15.4	20.4	5.8	2430	砂岩	扁平大型礫	75°
14	片刃礫器	E-6	12.6	10.8	4.8	768	砂岩		70°
15	片刃礫器	D-5	12.1	8.9	5.2	587	砂岩		60°
16	片刃礫器	D-6	10.2	5.7	3.5	240	砂岩	扁平礫	75°
17	片刃礫器	B-6-2	9.9	6.7	3.6	320	砂岩	角礫	70°
18	片刃礫器	B-7	14.1	6.3	3.7	320	砂岩	扁平礫	70°
19	片刃礫器	7号集石	16	10.2	7.1	1250	砂岩		80°
20	片刃礫器	B-6	15.6	12.5	5	1660	砂岩	分割礫、尖鋭化	80°
21	片刃礫器	7号集石	20.1	13.6	5.2	1490	砂岩	分割大型扁平礫	60°
22	片刃礫器	包含層	18.7	10.3	8	2010	砂岩	分割礫	65°
23	片刃礫器	包含層I	22.5	12.7	7	3140	砂岩	分割大型扁平礫	60°

表4 森の木遺跡出土両刃礫器一覧

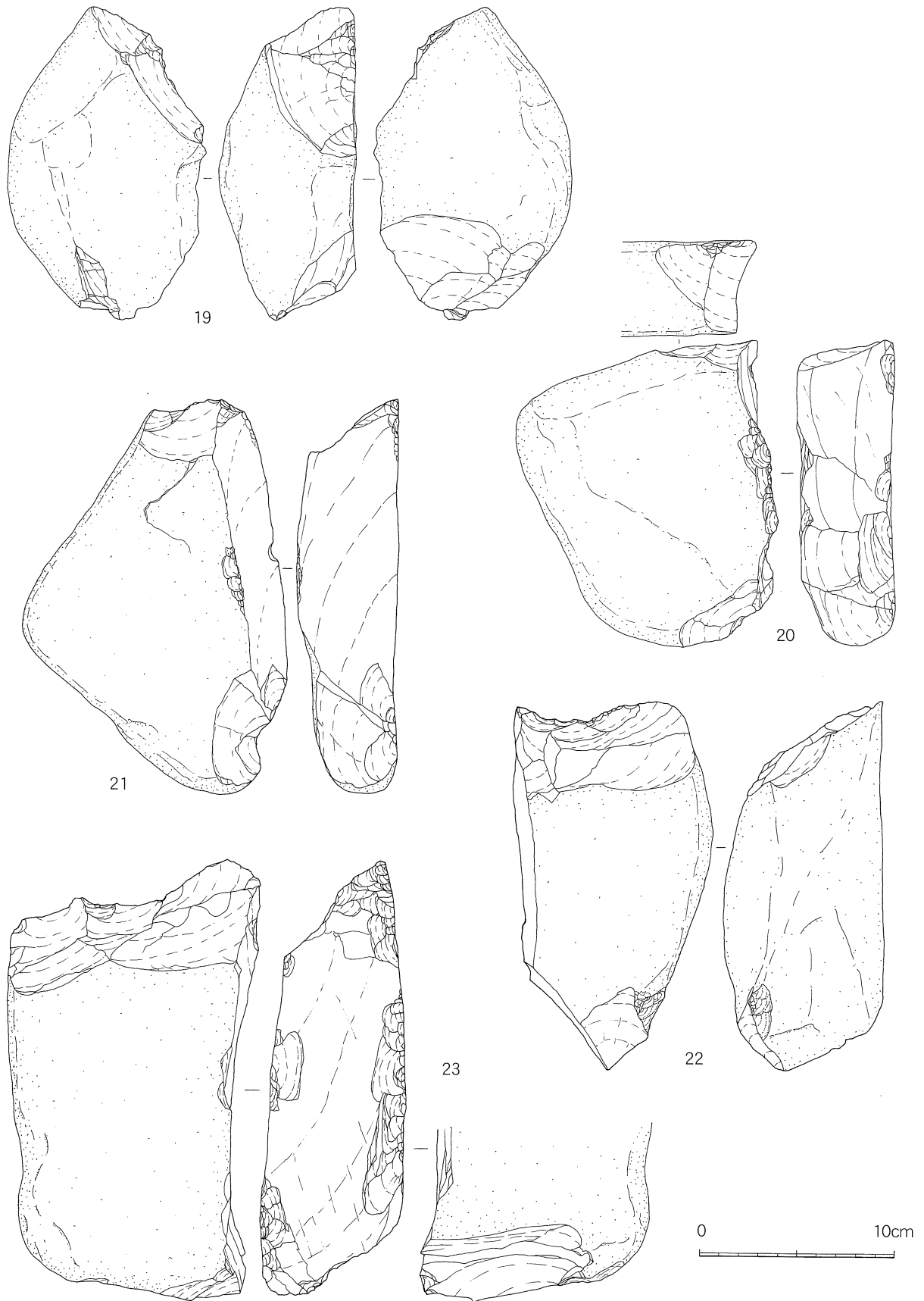
No	器種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	刃角
1	両刃礫器	D-6-2	13.3	10.3	2.6	509	砂岩	扁平円礫、刃部は細加工	50°
2	両刃礫器	B-7	14.5	8.7	6.6	1210	砂岩	刃部は交互剥離、外湾	75°
3	両刃礫器	B-6-2	14	10.5	7.6	1460	砂岩	円礫、一部敲打あり	75°
4	両刃礫器	C-6	15.9	8.4	6	1410	砂岩	端部に敲打痕	75°
5	両刃礫器	E-6	11.3	8.2	5.3	624	砂岩		80°
6	両刃礫器	包含層1	15.5	11.8	7.4	1460	砂岩	先端部に磨耗痕あり	70°
7	両刃礫器	D-6-2	12.4	10.9	5	832	砂岩	角礫、交互剥離	70°
8	両刃礫器	E-6-3	11.7	7.7	3.8	388	砂岩	ピック状	70°
9	彫器様石器	1トレンチ	7.2	4.9	3.1	134	頁岩	円礫、石核再利用?	70°
10	彫器様石器	E-3	12.2	6.9	4.5	580	砂岩	分割礫、一端に加工	80°
11	両刃礫器	B-7-2	13.5	11.2	4.6	764	砂岩	突出部に使用痕	55°
12	両刃礫器	B-7-2	10	8.4	3.4	365	砂岩	交互剥離	70°
13	両刃礫器	B-7-2	7.4	6.4	2.1	103	砂岩		45°
14	彫器様石器	E-5	10.1	5.7	4.7	362	砂岩	分割礫	55°



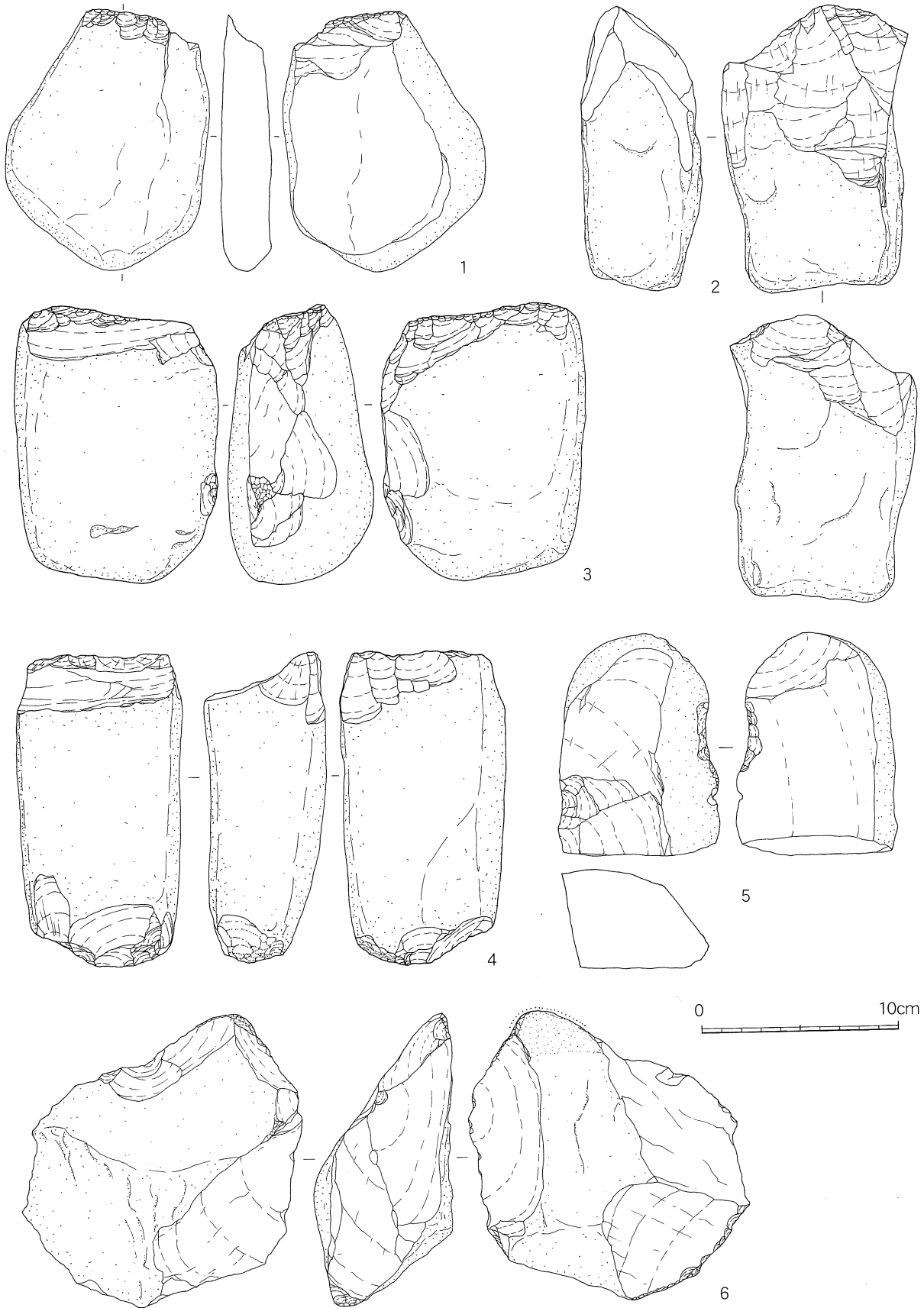
第30図 片刃礫器実測図（その1）



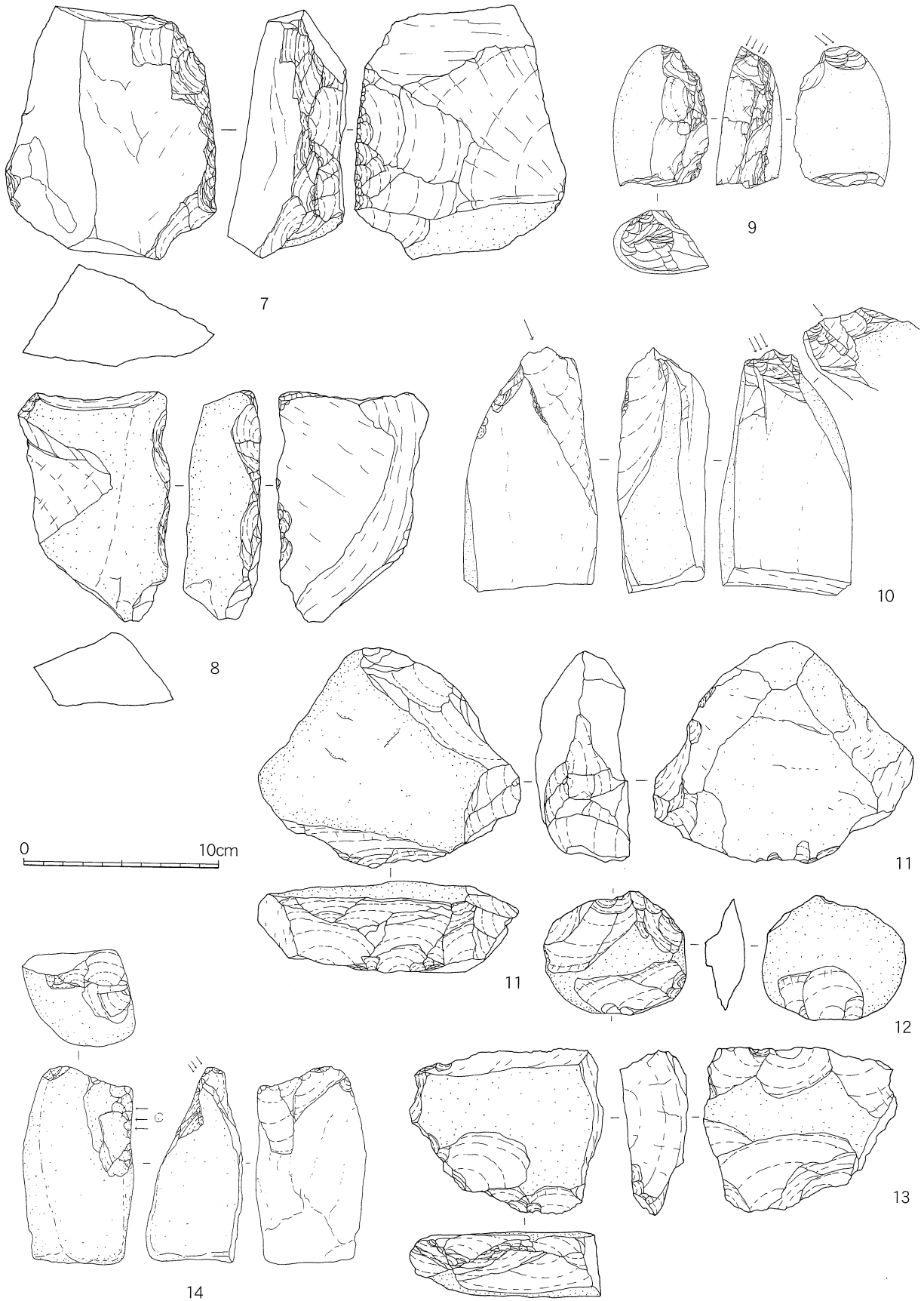
第31図 片刃礫器実測図（その2）



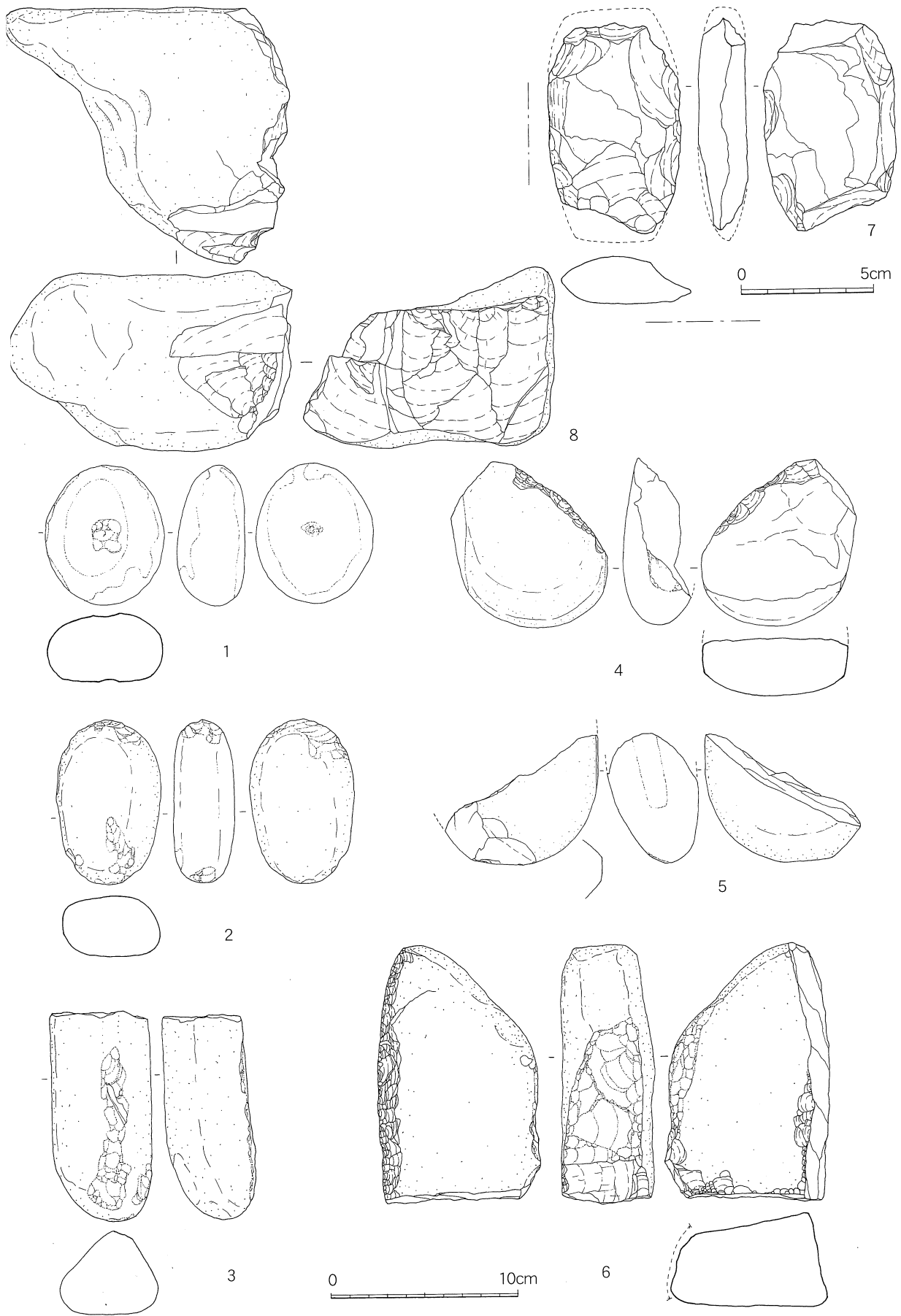
第32図 片刃礫器実測図（その3）



第33図 両刃礫器実測図 (その1)



第34図 両刃礫器実測図（その2）



第35図 敲石・磨石・大型石核実測図

敲石・磨石（第35図1～6）

敲石と磨石類を一括して扱う。1は全周に敲打痕と一面に磨面をさらに両面中央部に凹んだ敲打痕をもつ。2は両端部に敲打痕をもち、3は欠損しているが一端と稜部に敲打痕をもつ。4は両端に磨面をもつものであるが、破損後の縁辺に2次的な両面加工を施したものである。5は一側辺に磨面をもつ。6は、大型の裁断した偏平礫をハンマーストーンとしたものである。短い側辺には著しい敲打痕があり、長い方の側辺には稜を整えるための加工がなされている。その質量と石材からみて、大型石器製作のハンマーと推定される。

表5 森の木遺跡出土敲石・磨石類一覧

No	器種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 材	備 考
1	敲石、凹石	D-6-3	7.4	6.4	3.6	229	砂岩	
2	敲石	D-6-3	8.7	5.5	3.4	222	砂岩	
3	敲石	D-6	11.3	5.4	4.4	412	砂岩	長円礫
4	敲石、磨石	D-4	8.7	8.2	3.7	273	砂岩	半欠後2次加工(スクレイパー?)
5	敲石、磨石	E-6	6.9	8.2	4.5	240	砂岩	半欠
6	敲石	C-7	13.6	8.6	5	926	砂岩	扁平礫分割、ハンマーストーン

磨製石斧（第35図-7）

唯一の磨製石斧である。素材が風化しやすい頁岩のため、一部をのこしてほとんど剥落しているが、小型の薄手の磨製石斧として復元できる。現在長8.2cm、幅5.0cm、厚さ1.7cm、重量94.2kg。なお、頭部には2次加工がみられるが、これは研磨残しかと思われる。

大型石核（第35図-8）

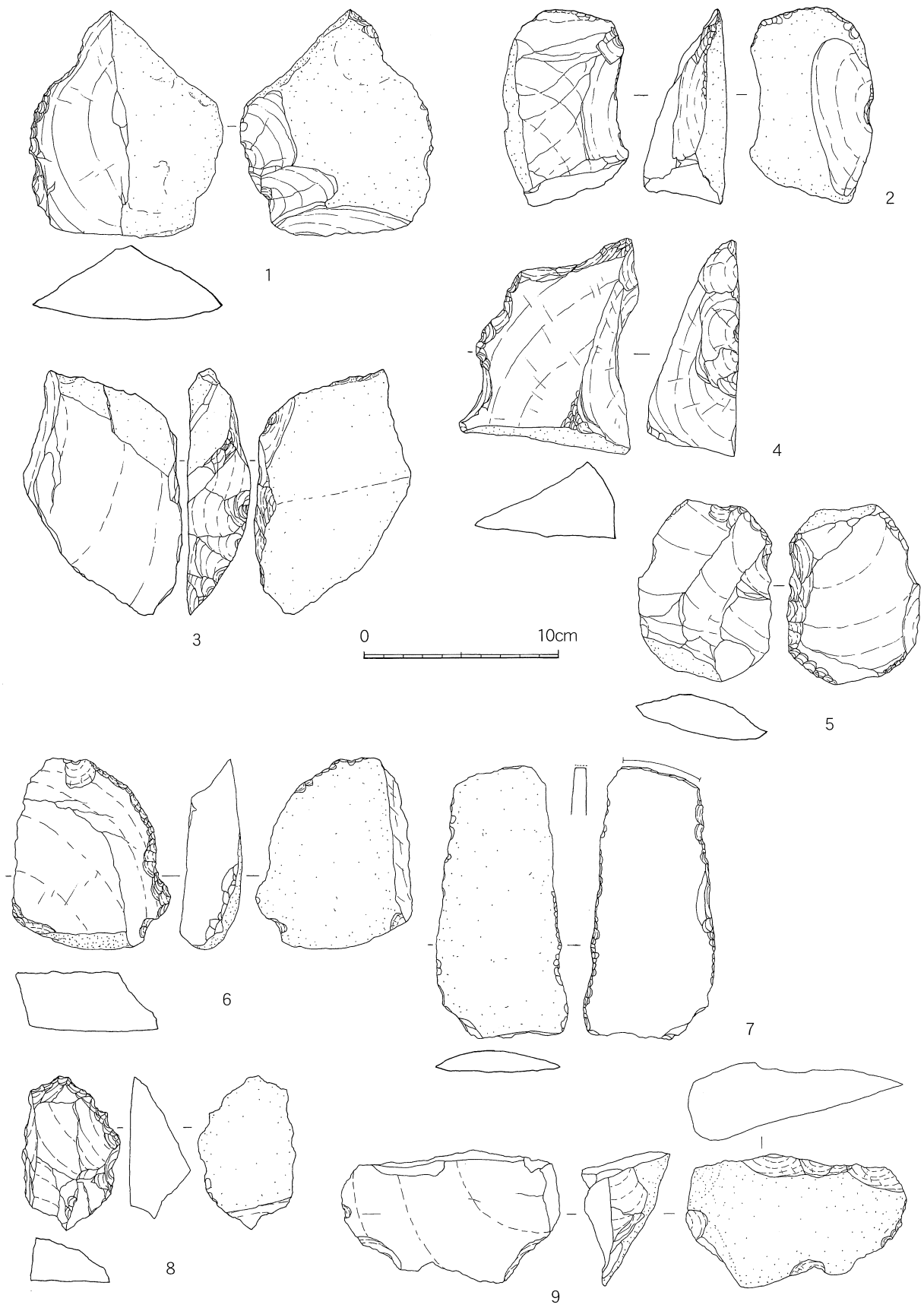
礫器類と後述する大型剥片と同じ素材の砂岩製の石核である。全体の形状と平坦な自然面からの一方的な幅広い剥離の作業工程からみて礫器類と区別して石核とした。最大長15.2cm、幅13.7、厚さ7.5cm、重量2,000kg。

大型(粗製)剥片石器（第36、37、38図）

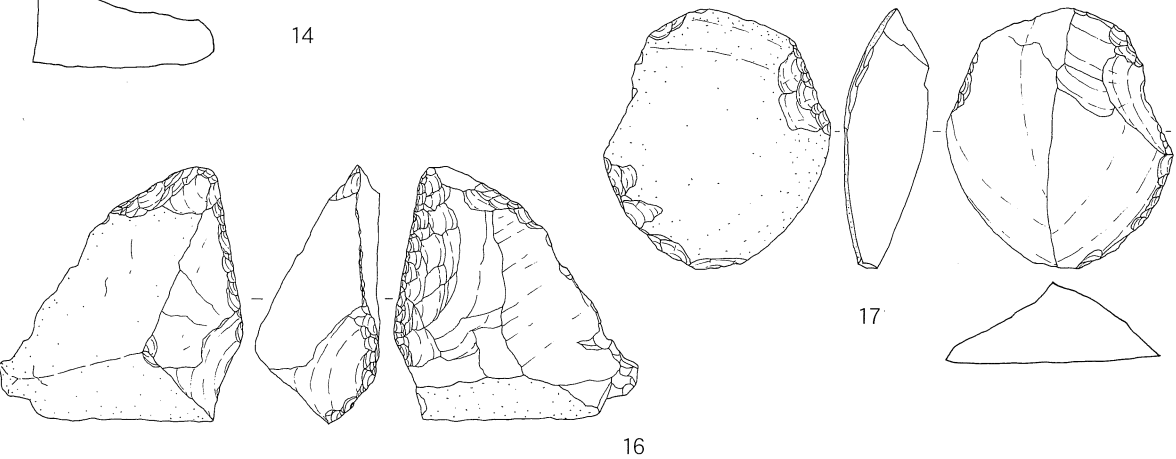
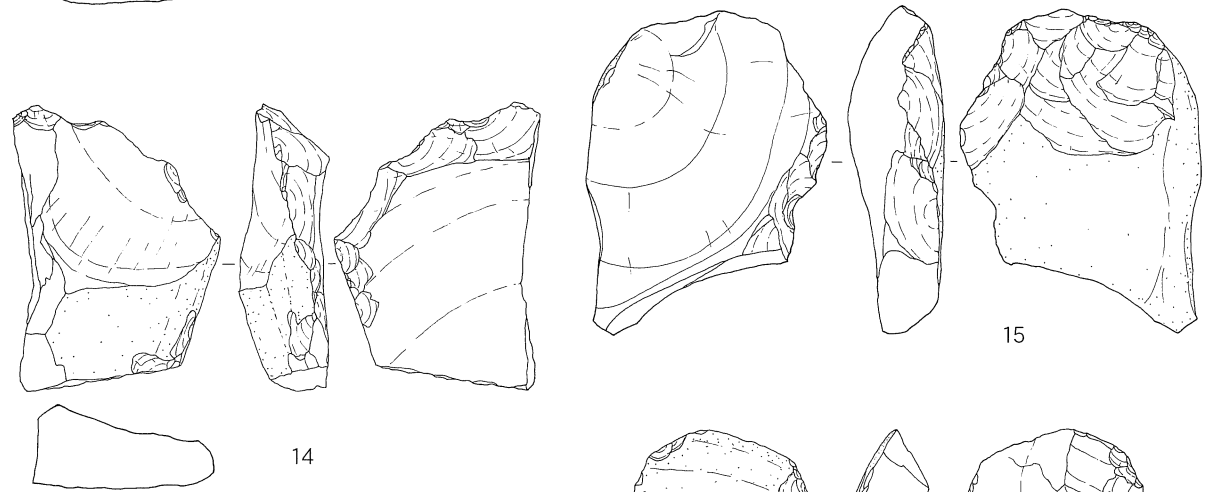
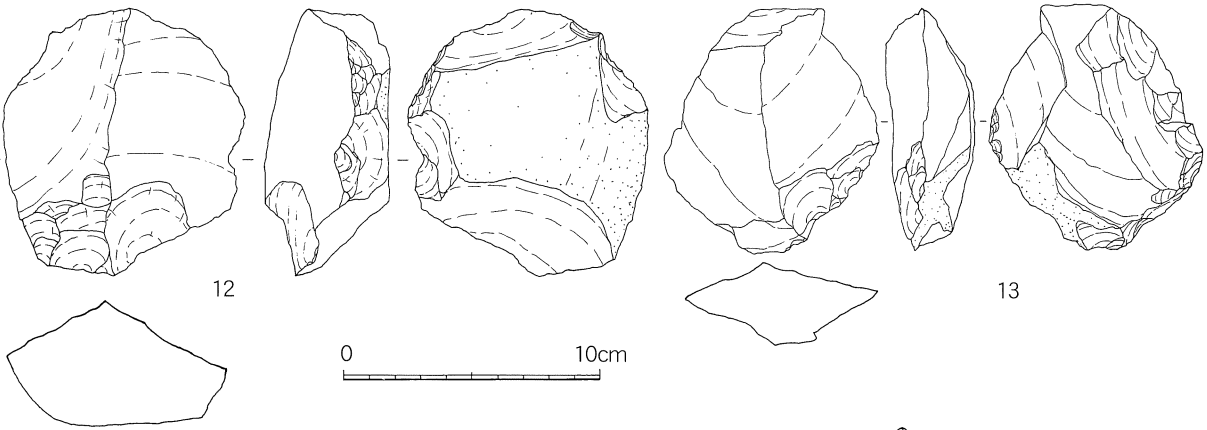
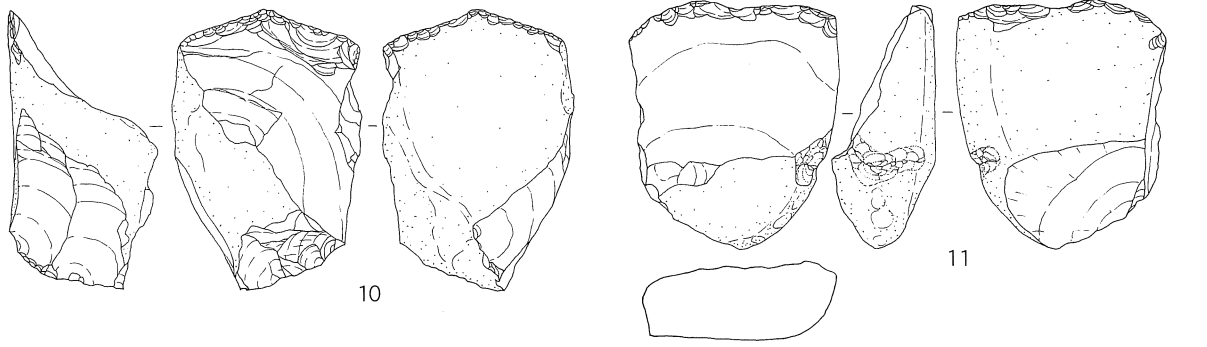
礫器類と同じ大越川河床に産する硬質の砂岩を素材とする剥片石器類である。これらはいずれも大型の削器類として一括できるものである。一見礫器に形状に近いものがあり、使用目的も一部共通するものがあるとみられるものである。

1は両面に大きく自然面をのこし、鋭い縁辺分厚いに細かい2次加工を施したもので、その反対部に調整のため大きな剥離がみられる。2は、鋭い短辺に細かい2次加工を行っている。3は鋭い縁辺を生かすように、一側辺に刃潰し状の片面加工を行っている。4は波状の刃縁を形成するように片面加工し、他の長側辺は刃潰し的加工を行っている。5は比較的整った幅広剥片に主として片面加工を行っている。7は長い薄手の剥片の一端を小さい敲打によって整え、他の両側辺に細かい加工を施している。8は、やや小型であるが、鋸歯状の刃部を作っている。10は厚手の剥片の薄くなった一端に両面加工を細かく行い、刃部をやや山形に仕上げたていねいなスクレイパーである。他の部分には比較的大きな調整の剥離がみられる。石材もことのほか緻密である。11は、10に近い形状であるが、刃部の加工にやや粗い。12～15は大きめの2次加工によるもの、16・17は一辺に細かい両面加工が施されている。16はとくに尖頭状に整えられている。

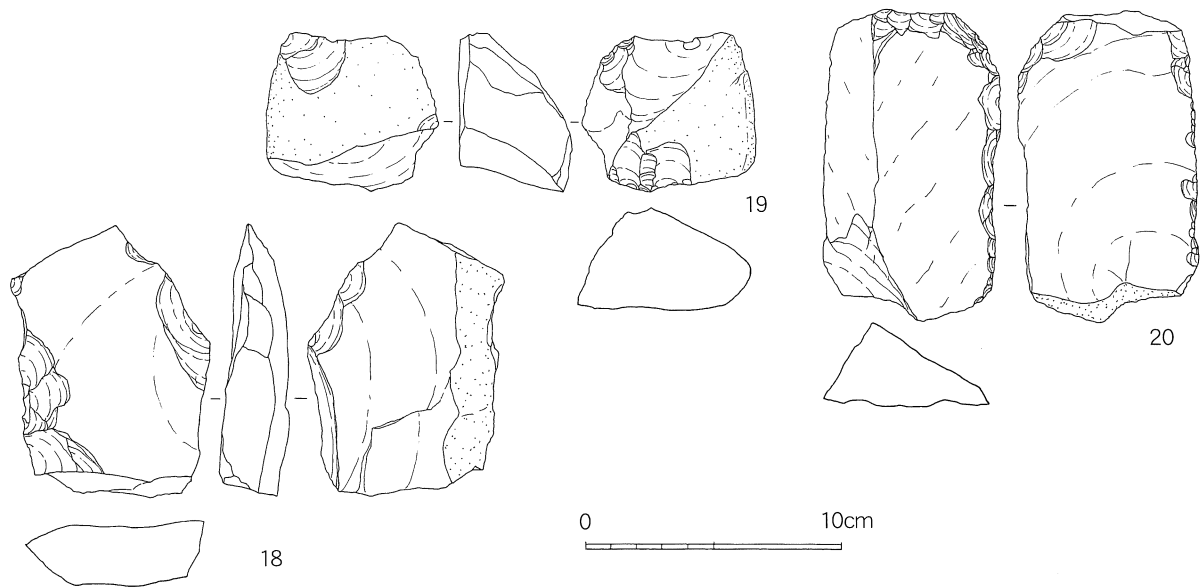
これらの大型剥片石器の重量についていえば、礫器に比べ、500gを超えるものはなく、100～350gのもの15点、400～500gまでのもの4点の2つのグループに分かれる。一見礫器に近いものとみられても、そこに重量的には大きな差異がみられる。



第36図 大型(粗製)剥片石器実測図(その1)



第37図 大型(粗製)剥片石器実測図(その2)



第38図 大型（粗製）剥片石器実測図（その3）

表6 森の木遺跡出土大型（粗製）剥片石器一覧

No	器種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
1	削器	D区	11.6	9.9	3.8	454	砂岩	自然打面、交互剥離
2	2次加工石器	D-6	10	6.3	4.3	258	砂岩	削器
3	2次加工石器	A-2	12.6	8	3.2	294	砂岩	blunting状加工
4	削器	E-b	10	8.8	3.8	336	砂岩	自然打面、片面加工
5	削器	A区	9.9	8.2	3	280	砂岩	自然打面、主として片面加工
6	削器	A区	10	8.2	2.9	280	砂岩	ほぼ片刃
7	2次加工石器	D-4アカホヤ	13.9	6.4	1.1	143	砂岩	小口部は敲打痕
8	削器	E-6	8	5	2.3	111	砂岩	片面加工
10	削器	E-4アカホヤ	10.9	7.5	5.8	420	砂岩	
11	削器	B-6-2	9.6	8.1	4	313	砂岩	
12	2次加工石器	D-4アカホヤ	10.4	9.3	4.8	454	砂岩	円盤状
13	2次加工石器	D-6	9.5	8.2	3.7	323	砂岩	円盤状
14	2次加工石器	D-6-2	11.1	7.1	3.5	322	砂岩	片面加工
15	2次加工石器	D-6	12.3	9.3	3.7	482	砂岩	交互剥離
16	尖頭状石器	E-5-3	9.9	9.6	4.8	328	砂岩	両面加工
17	削器	D-4アカホヤ	10	8.6	3.2	252	砂岩	両面加工
18	2次加工石器	E-B	10.5	7.5	2.4	241	砂岩	交互剥離
19	搔器	D-6	6.8	5.8	4.3	179	砂岩	素材は分割礫？
20	2次加工石器	E-6	12.1	6.8	3.3	306	砂岩	錯交剥離

剥片石器類（第39～43図）

中・小型の剥片石器類である。石材は、砂岩以外の緻密な黒曜石、チャート、ホルンフェルス等を利用しており、これらと同じ石材の石核も多数出土している。

石鏃（第39図1～5）

いずれも凹基式であるが、1・2は小型、3は鍬形に近く、4は鋸歯状の張り出した脚部をもつ精巧なもの、5は柳葉形に近いものである。

スクレイパー類（第39図6、7、9～13、16、第40図17、18、20、第41図25～34、第42図36～41、第43図48）

削器、搔器類である。2次加工剥片ととくに明確な差はないが、加工が入念である部位に集中したものとした。6は一見両面加工の入念な石鏃に近い、7は微妙な片面加工、9は薄い縦長剥片に両面加工も施したものである。

表7 森の木遺跡出土剥片石器一覧

No	器種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
1	石鏃	C-6G	1.7	1.5	0.4	0.9	チャート	
2	石鏃	E-6-3	1.7	1.4	0.4	0.5	チャート	
3	石鏃	表土	3.1	1.9	0.8	2.4	姫島黒曜石	
4	石鏃	トレンチ内	3.4	2.1	0.4	1.5	チャート	
5	石鏃	表土	2.6	1.2	0.3	1.3	チャート	
6	削器	表採	2.5	2.4	0.7	2.7	チャート	
7	削器	E-4	3.5	2.6	0.7	6.6	ホルンフェルス	アカホヤ層
8	2次加工剥片	表採	4.0	2.0	1.2	6.5	チャート	
9	削器	E-4-17	4.3	1.3	0.4	2.0	ホルンフェルス	
10	石錐	表採	5.3	2.9	2.1	25.3	ホルンフェルス	
11	2次加工剥片	D-6-3	4.6	3.3	1.9	19.0	ホルンフェルス	
12	削器	D-6	4.7	3.3	1.9	19.0	ホルンフェルス	
13	削器	B-6-2	6.3	3.2	2.3	33.0	ホルンフェルス	
14	剥片	E-6	6.1	2.1	0.8	7.2	ホルンフェルス	アカホヤ層、打面調整剥片
15	剥片	D-4	5.1	5.3	1.9	33.7	チャート	アカホヤ層
16	削器	D-6-2	7.1	3.6	0.9	37.5	チャート	
17	削器	B-7	7.8	3.6	1.0	26.4	頁岩	1号土坑(SK1)内出土
18	削器	1トレンチ	6.4	3.9	1.7	45.1	ホルンフェルス	
19	2次加工剥片	D-4	7.4	2.5	0.6	13.6	チャート	
20	削器	B-6	8.8	4.9	2.1	117.0	頁岩	
21	2次加工剥片	B-7	5.7	5.7	1.7	32.5	頁岩	礫層直上、先端に細かい加工
22	剥片	E-6	5.1	4.3	1.2	31.3	ホルンフェルス	
23	剥片	D-6-2	7.2	3.9	1.4	46.7	ホルンフェルス	
24	2次加工剥片	D-5	6.0	5.4	2.7	107.0	ホルンフェルス	アカホヤ層
25	削器	D-6-3	4.3	3.6	1.2	19.0	ホルンフェルス	ノッチ状
26	削器	E-4-G	5.2	3.7	1.4	28.7	ホルンフェルス	片面加工
27	削器	C-6	5.5	4.0	2.5	59.9	ホルンフェルス	両面加工
28	削器	D-7-3	4.7	2.9	1.0	10.2	頁岩?	使用痕あり
29	削器	6号集石	4.6	2.8	0.7	12.4	チャート	片面加工
30	削器	B-6-2	4.1	2.0	1.0	9.1	チャート	片面加工
31	削器	トレンチ	3.5	2.4	1.0	8.6	チャート	片面加工
32	削器	E-4	3.1	2.2	1.2	8.8	チャート	アカホヤ層
33	削器	表採	6.5	5.6	2.4	95.8	頁岩?	片面加工、28と同一石材
34	削器	D-7-3	6.5	4.9	1.3	51.0	ホルンフェルス	一端はノッチ状
35	削器	D-5	3.2	2.6	0.9	9.4	チャート	両面加工
36	削器	A区	5.0	3.9	1.6	23.4	ホルンフェルス	ノッチ状
37	削器	D-6	5.8	3.7	1.3	24.4	ホルンフェルス	ノッチ状
38	削器	E-6	4.1	2.6	1.5	15.8	ホルンフェルス	ノッチ状
39	削器	D-6	4.0	3.5	1.2	14.8	ホルンフェルス	ノッチ状
40	削器	E-6-3	4.2	4.0	1.0	24.0	ホルンフェルス	ノッチ状
41	削器	包含層I	3.5	3.0	1.5	15.3	ホルンフェルス	鋸歯状
42	2次加工剥片	D-5	5.7	3.0	1.3	22.6	ホルンフェルス	アカホヤ層
43	彫器様石器	D-6-2	4.4	4.4	1.9	37.3	ホルンフェルス	他の端部に2次加工
44	彫器様石器	D-4	3.3	2.8	1.2	10.8	サヌカイト質岩	他の端部に整形加工
45	彫器様石器	北端部	7.8	4.1	2.9	83.7	ホルンフェルス	
46	2次加工剥片	D-6-3	5.6	2.9	1.4	20.6	頁岩	28、33と同一石材、使用痕あり
47	使用痕ある剥片	E-4-2	6.7	4.3	0.7	24.3	ホルンフェルス	
48	削器	E-6-3	8.9	5.9	1.9	80.7	ホルンフェルス	両面加工
49	剥片	E-4-G	5.3	4.3	1.2	33.9	ホルンフェルス	平担打面(単一)
50	剥片	D-4	5.9	4.3	1.8	31.1	頁岩	
51	剥片	B-6-2	9.5	5.6	1.7	68.5	頁岩	平担打面(単一)

10は錐状に片面加工したもの、11は片面加工、12は両面加工、13・20は錯交剥離によって形をととのえている。16はノッチ状の加工を施している。17・18は幅広の整った縦長剥片を利用した典型的な削器である。25は比較的大型の剥片を楕円形に加工したものである。

彫器様石器（第42図43～45）

端部に槌状剥離をもつ、後期旧石器時代の彫器に類似する形態の石器である。43は主要剥離側の端部にのこされた剥離面を加撃面として剥離を行っている。44は分割面を加撃面として数回の槌状剥離を行っており、最も彫器に近い。45は、分割した角礫の一端に彫器的な加工を施している。これらは、いずれも彫器的な機能を有していたものと思われる。

2次加工のある剥片類（第39図5・8・14・15、第40図19・21・24、第42図42・46）

一見ナイフ形石器に見える基部にノッチを施したもの、15・19・21・24は一部に加工痕をもつものもある。

使用痕のある剥片（第42図47）

47は、不定形剥の打面に近い方の両側に顕著な使用痕を残している。

剥片類（第39図14、第40図22・23、第41図26～27）

剥片は多数出土しているが代表的なものをあげてみた。

14は剥離前に打面を細かく調整した縦長剥片、22は複数打面の石核を母材とするもの、23・26～28は単一打面の石核を母材とするものである。とくにこれらは幅広の整った縦長剥片であり、その作業の連続性をうかがい知ることができる。

石核（第44～47図）

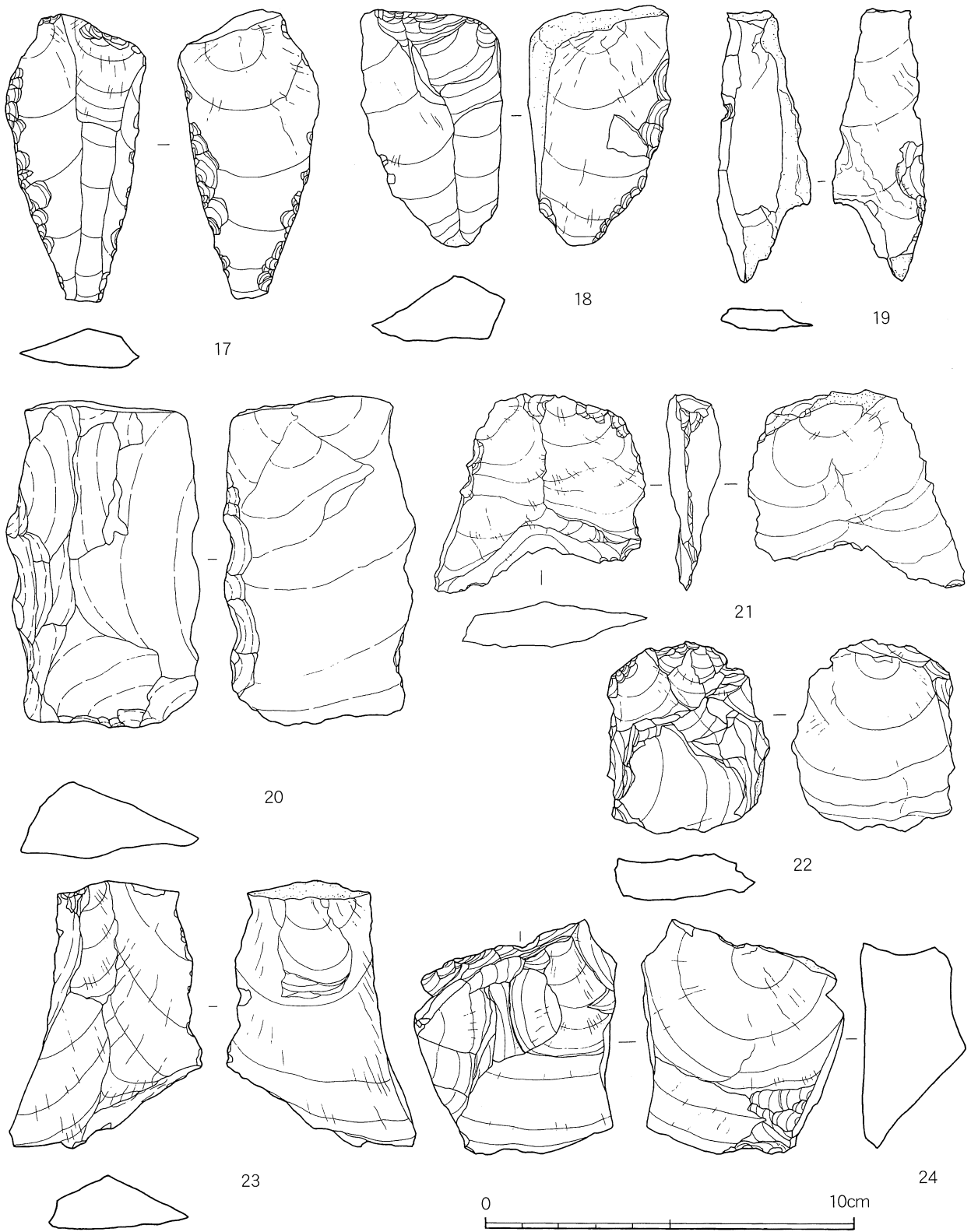
中・小型の剥片石器類の母材となった石核類である。石材は同じくホルンフェルスが主として使われ、一部チャート・頁岩も使用されている。自然と打面とするものに1・2・15がある。6・12は単一の大きな剥離面を打面とするもの、16は自然面を単一の剥離面の両端を打面とするものである。3・4、7～10、13・14は複数の打面をもつものである。4・11は円盤状を呈すものである。3・5・11・12・16・17は、主要な剥片剥離が終了したのち、細かく剥離を加えており、削器、搔器として再利用したものと思われる。

表8 森の木遺跡出土石核一覧

No	器種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
1	石核	A-2	8.5	7.6	5.8	465	ホルンフェルス	自然打面
2	石核	B-6-2	3.4	5.9	4.4	99	"	
3	石核	E-6	4.6	3.2	2.6	44	"	複数打面(平担・調整)
4	石核	E-4-2	5.1	6.1	2.3	65	"	削器として2次使用
5	石核	D-6	4.2	5.7	3.2	67	"	削器として2次使用
6	石核	排土	4.5	4.2	4.9	82	"	
7	石核	E-4-G	3.7	6.3	3.5	70	"	アカホヤ層
8	石核	D-6-2	7.8	6.7	4.8	271	"	
9	石核	B-7-2	4.8	5.2	3.7	80	"	
10	石核	D-6-3	4.1	3.7	3.4	62	チャート	
11	石核	表土	8.6	7.6	3.5	236	ホルンフェルス	円盤状、削器として2次使用
12	石核	D-6-3	5.2	8.0	3.7	142	"	
13	石核	B-7-2	5.4	8.1	4.8	199	"	
14	石核	E-5-3	4.7	5.5	5.6	159	"	
15	石核	5号集石	5.6	4.9	1.7	74	"	残核
16	石核	D-6-2	7.8	5.3	4.4	177	頁岩	平担打面と自然打面
17	石核	1号土坑	7.3	6.4	3.9	179	ホルンフェルス	削器として2次的加工(Core Scrape)
18	石核	A区	4.7	3.3	2.4	30	チャート	角礫、平担、自然打面



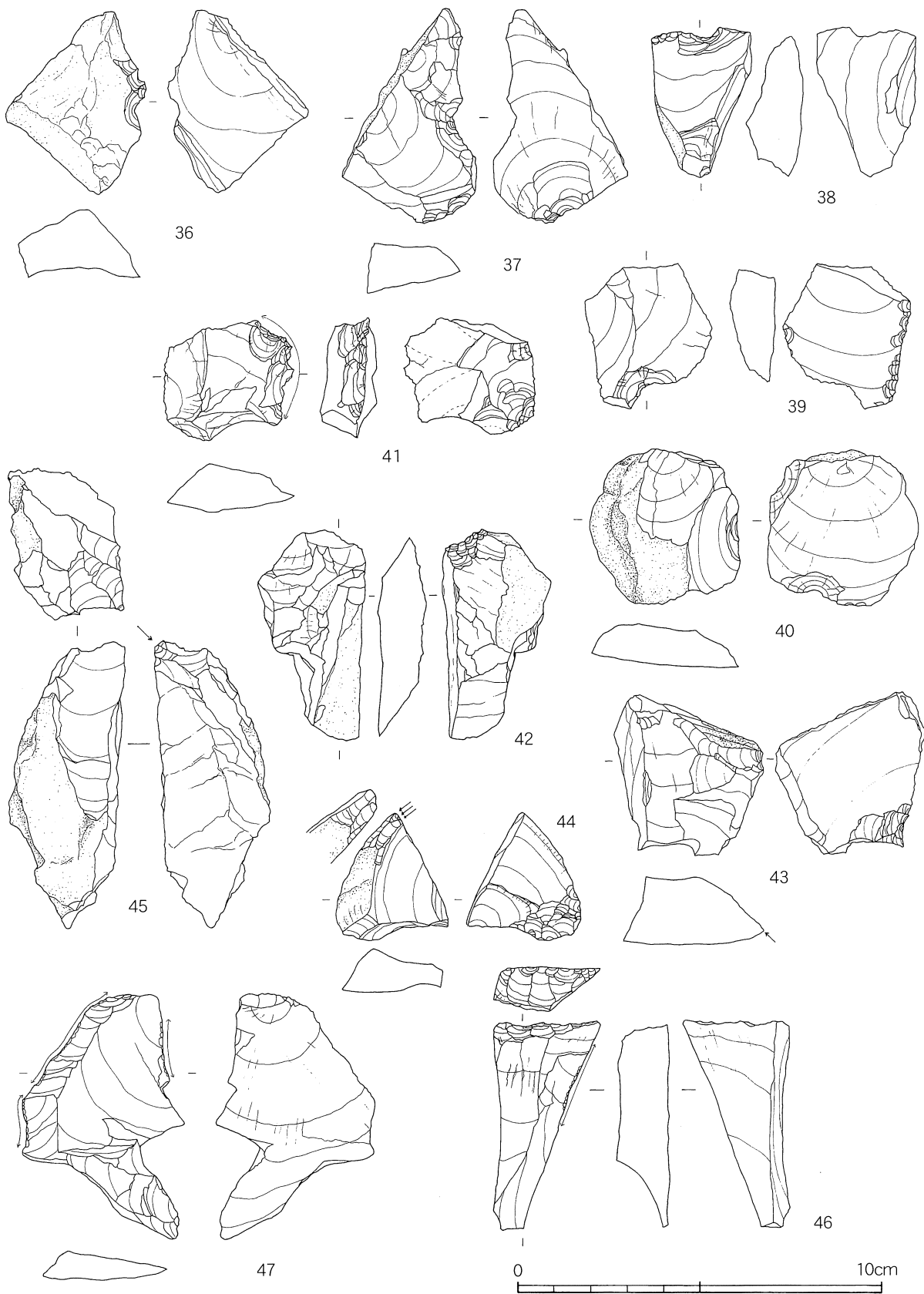
第39図 剥片石器類実測図 (その1)



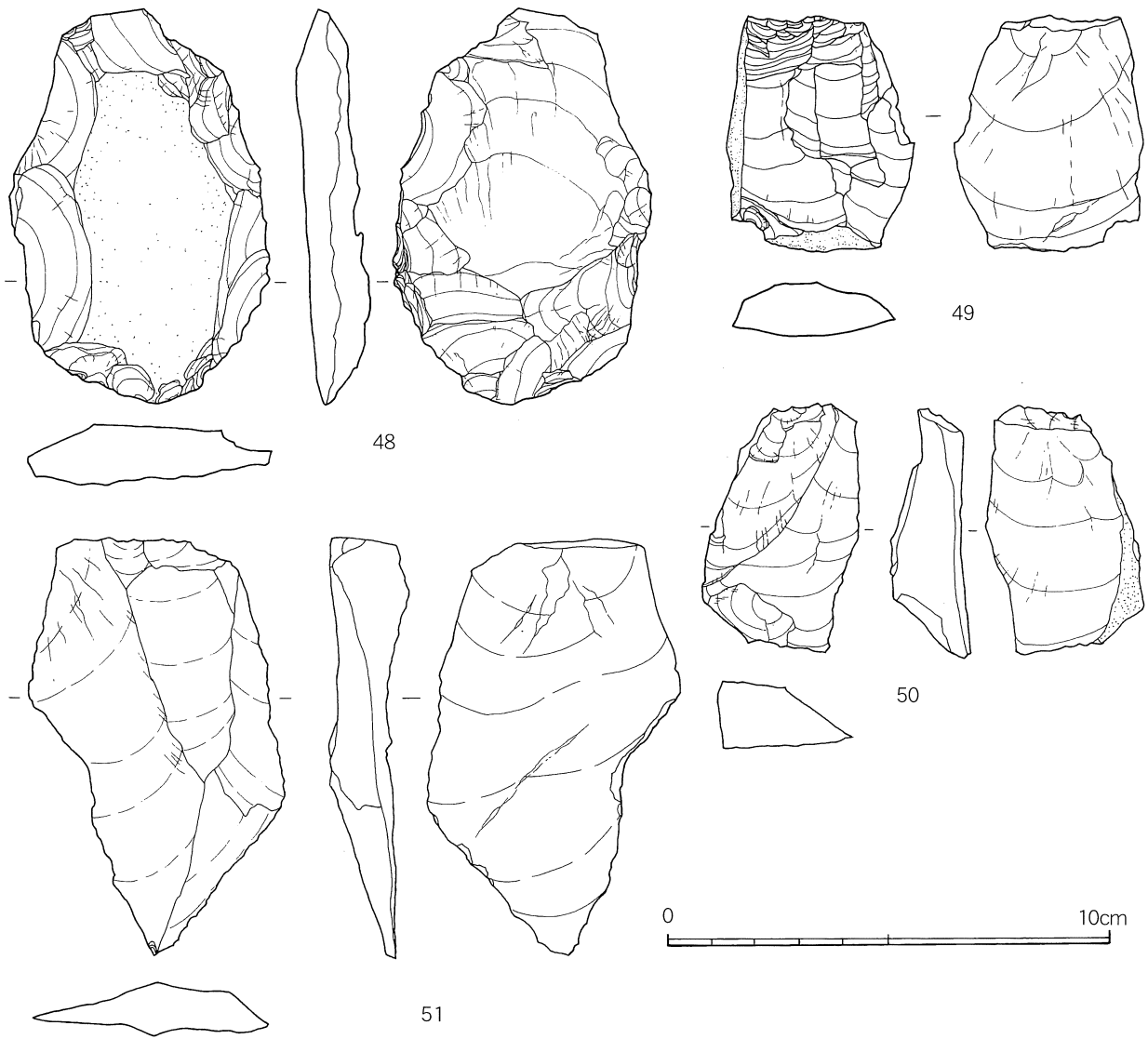
第40図 剥片石器類実測図（その2）



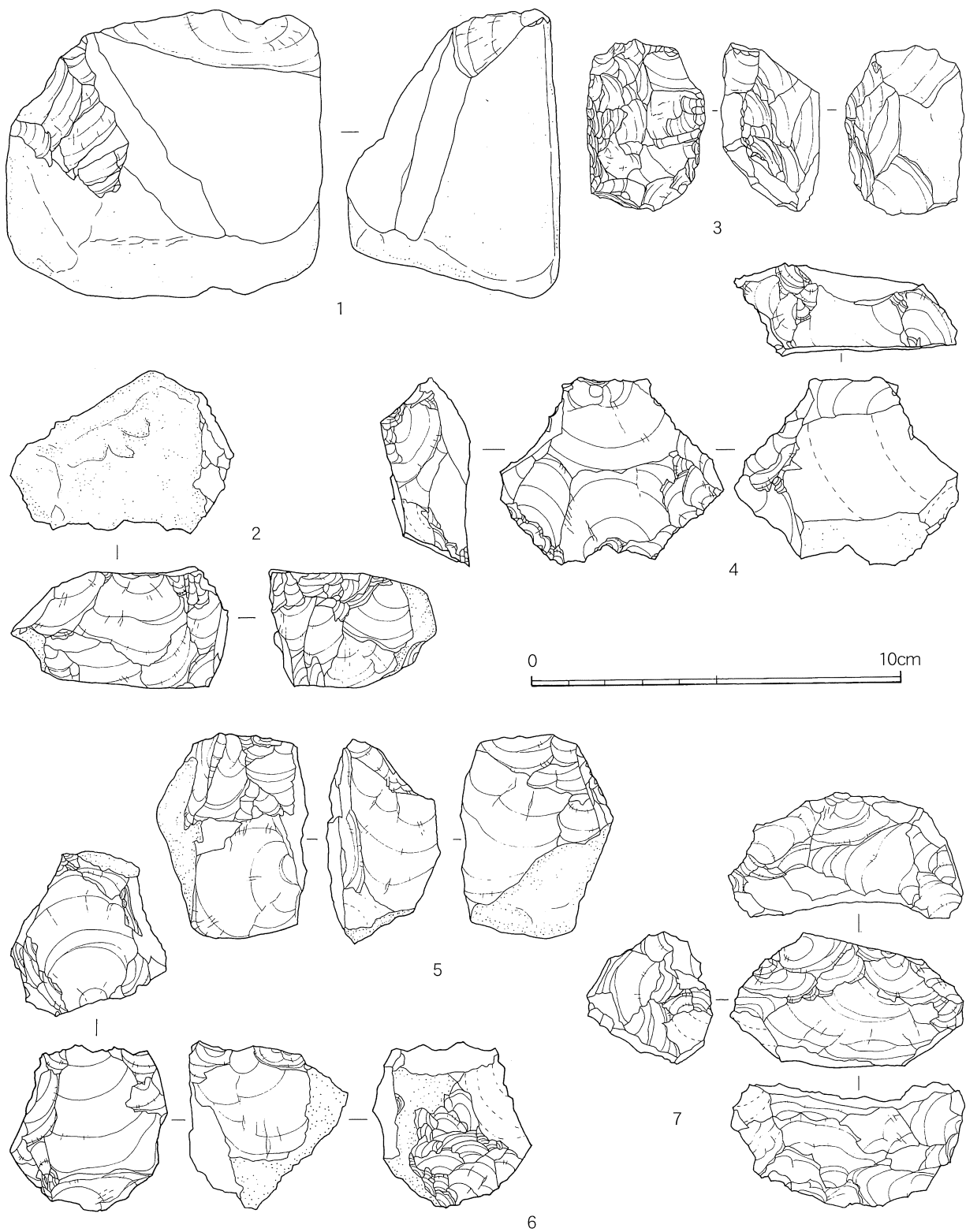
第41図 剥片石器類実測図 (その3)



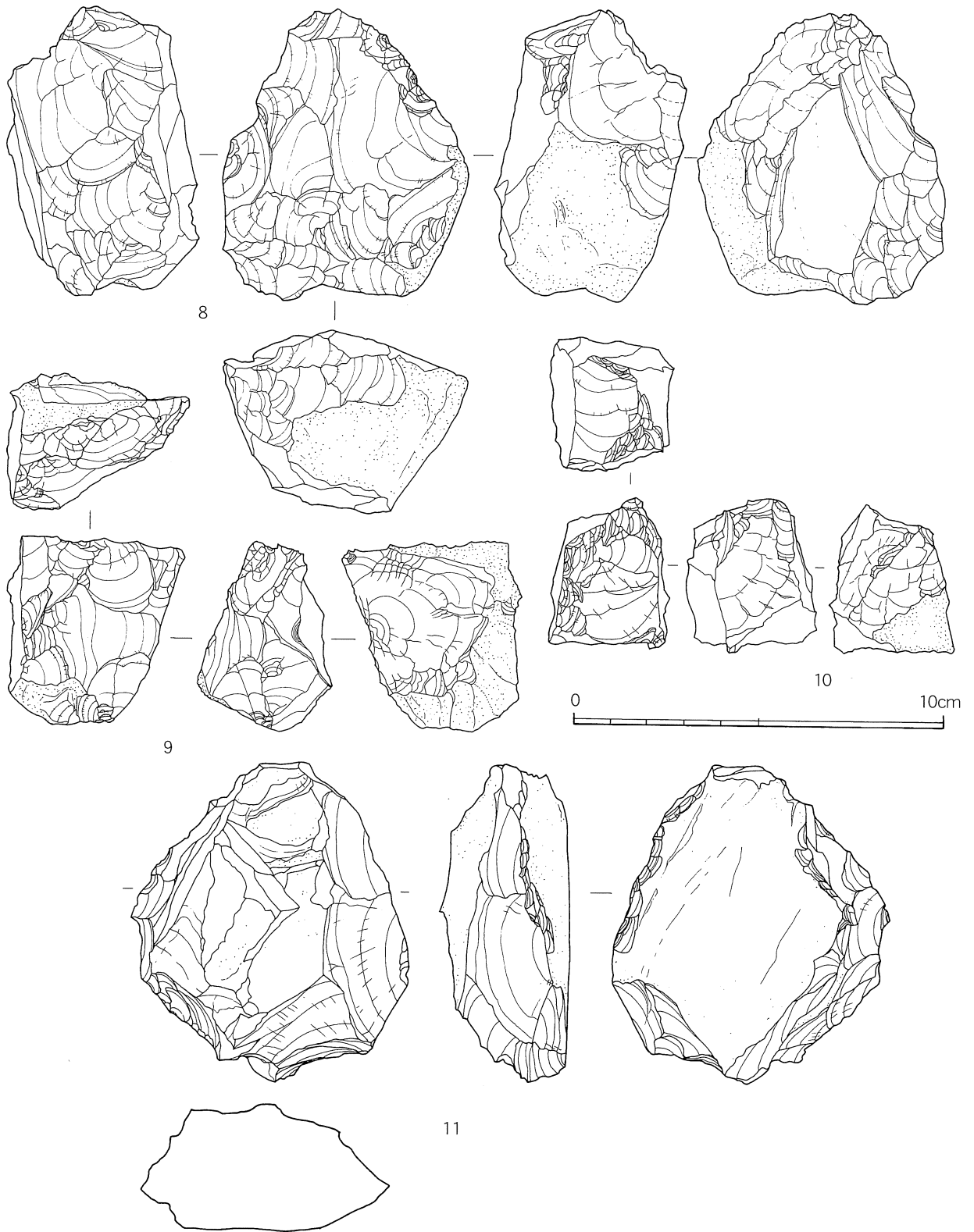
第42図 剥片石器類実測図（その4）



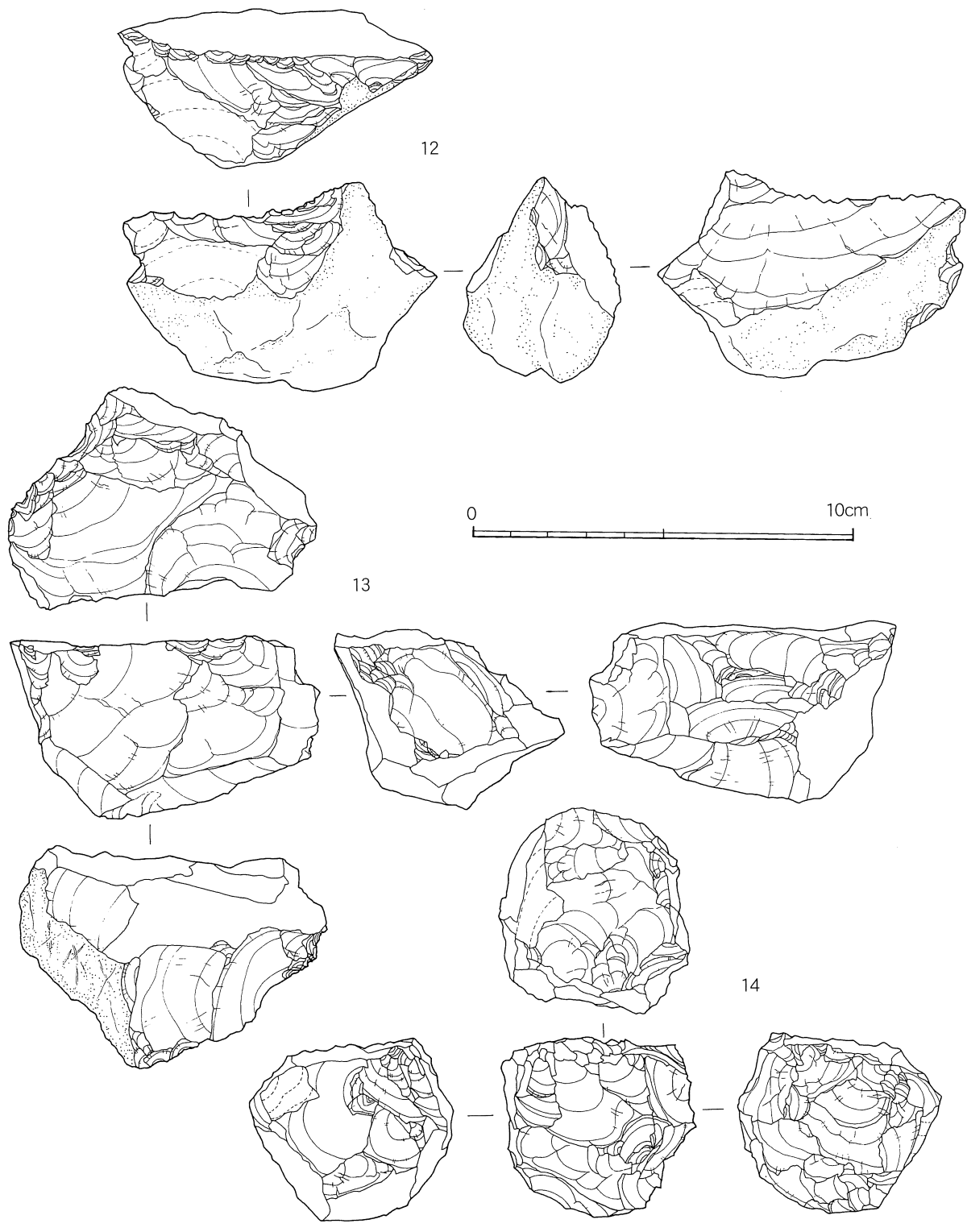
第43図 剥片石器類実測図（その5）



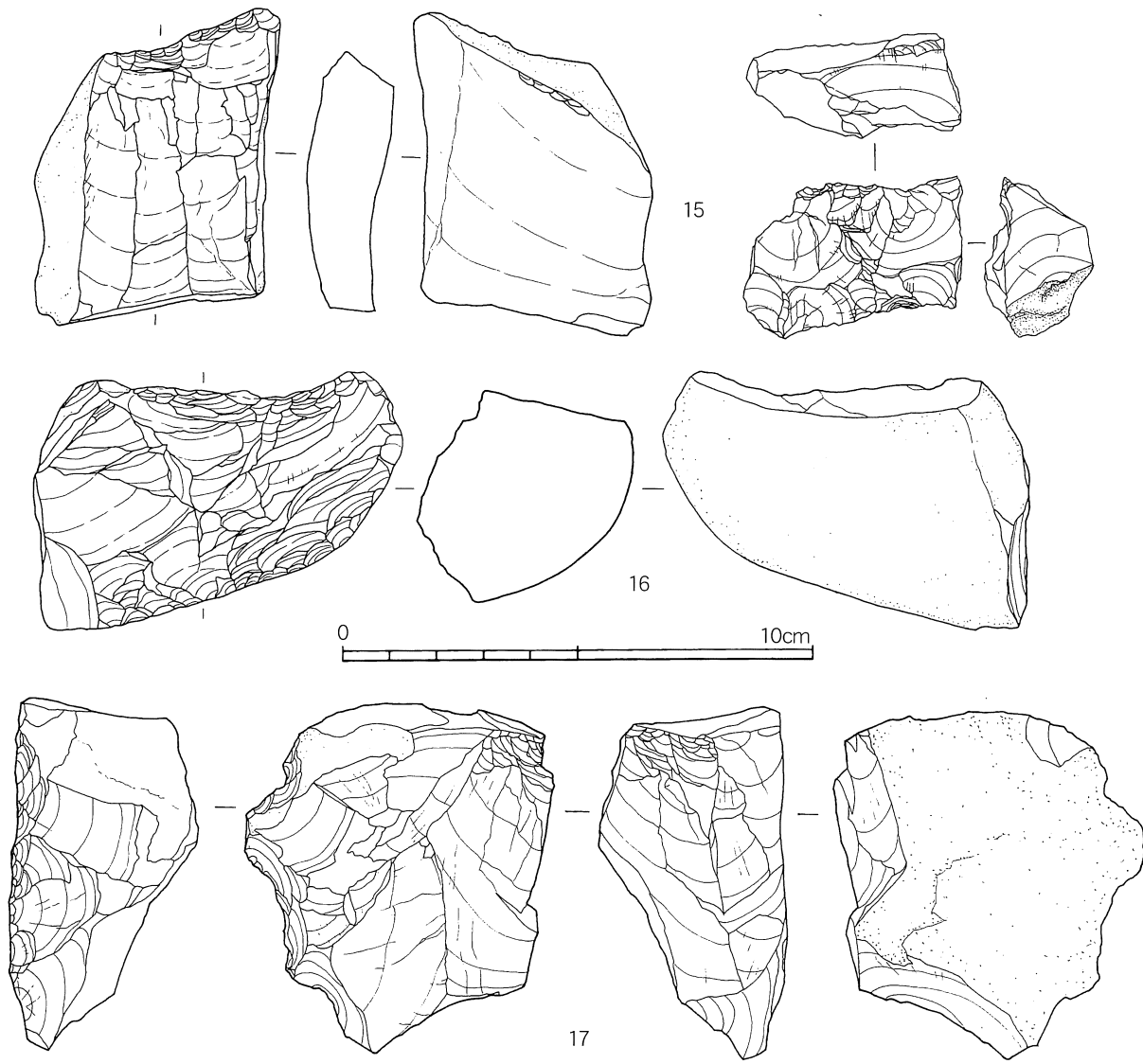
第44図 石核実測図（その1）



第45図 石核実測図 (その2)



第46図 石核実測図（その3）



第47図 石核実測図（その4）

第4章. ま と め

発掘調査の結果、森の木遺跡は約8,000年前頃の縄文時代早期の遺跡であることが分かった。出土した遺構・土器・石器の特徴から判明したことについて記し、まとめとしたい。

◎森の木遺跡の遺構について

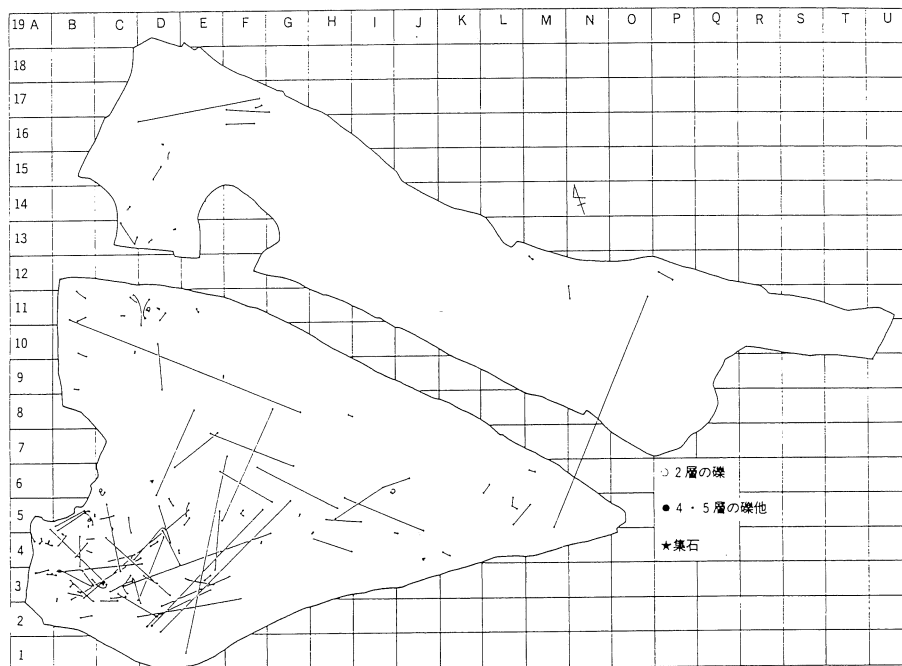
森の木遺跡では、縄文時代早期に属する土坑が3基・集石遺構11基のほか多数の礫が出土した。土坑は各種の性格をもつものがあるので、森の木遺跡の場合ははっきりしたことはわからない。

集石遺構は、肉や植物質食料を加熱・蒸し焼きした調理の遺構とされている。総数は11基あるが、この数字は長年の集積の結果であり、多分同一時点では1～2基程度しか使われなかったであろう。一般的な集石は下部に扁平な石を皿状に並べた部分があり、その上に別の場所で加熱した小型の礫を多数詰め込んで使用したものである。礫は生活する上で必要があり付近の河原から意識的に遺跡内に持ちこまれたものであり、使用し、その結果として一部のは割れた状態で出土する。この割れた礫は、遺跡内での行動を復元する有力な証拠として当時の生活を考える際に重要である。これまで大分県内では、大野郡清川村柿木谷（かきのきだに）遺跡（第49図）、速見郡日出町エゴノクチ遺跡（第48図）の調査で割れた礫の接合状態から、同一時点の集石遺構の数をつかもうと試みたがこの点については明らかにできないままである。ただ、柿木谷遺跡では礫集中部の一部に特に接合関係の濃密な部分があり、この小範囲が一回の使用範囲であり、一見同一に見えた礫集中部は複数回の集積であることが分かった。エゴノクチ遺跡ではかなりの数の接合例を把握できたが、集石遺構ではなく一般的な包含層の礫が主体であった。近距離のものが多く、50m程度離れて出土したものもみられた。その意味を明確に説明できる状態ではなかったが、この作業を各地の遺跡で積み重ねることによりある種の傾向がつかめたり、別の面が明らかになると思う。森の木遺跡の場合は、集石内での接合が多いが、少数は集石相互で接合していた。残念ながら調査前に想定したような遺跡内での活動の追跡には至らなかった。（高橋信武）

《引用文献》

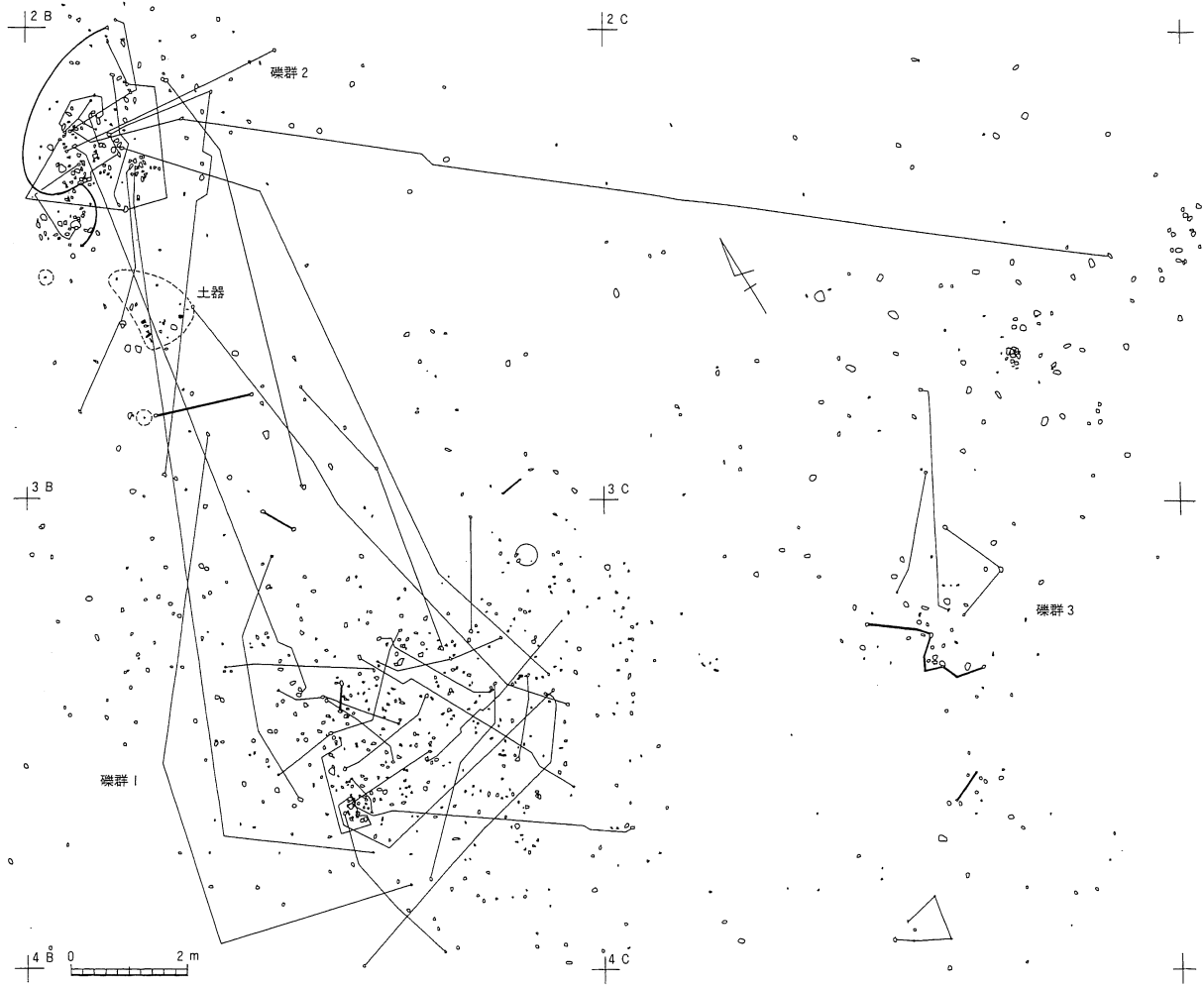
高橋信武 1997「柿木谷遺跡」清川村教育委員会

高橋信武 1993「宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書」大分県教育委員会



第48図 エゴノクチ遺跡の礫接合関係図

※太線は接合後、完形になるもの。細線は未完形。



第49図 柿木谷遺跡の縄文時代早期陶群の割陶接合関係図

◎森の木遺跡の土器について

大分県内では、これまで100カ所以上の押型文土器が出土する遺跡が知られている。こうした遺跡を発掘調査すると、多くは前後する幾つかの土器型式が出土する。しかし、森の木遺跡から出土した押型文土器は、これまでの編年研究で明らかになっている土器型式を当てはめると、数量が少ないもののほぼ一型式であり、その内容を考える上で貴重な資料と言える。

まず、森の木遺跡出土の押型文土器の特徴であるが、口縁部内面に第28図1を除き、口縁部に直角に原体条痕が施文されて、その下位にも横方向の押型文が見られる。さらに、外面には細かい押型文で、横方向を基本として施文している。例外的に第27図2・5・9・11・25、第28図2・7は縦方向の押型文であるが、第27図5・11・25を除くと、これらは口径が小型である。口縁部の形態は、ほぼ直口している。また、土器群の組成をみると、押型文土器が約15%、無文土器が約85%である。以上のような特徴は、これまでの編年研究では、早水台式土器にあたる。また、唯一原体条痕のない第28図1は、土器型式的には、早水台式土器に先行する稻荷山式土器であるが、数量的に見て、この時期の残存と考える。

以上が、森の木遺跡の縄文時代早期の土器であるが、その組成は東北部九州の典型的な様相を示している。そこで、次にこれらの土器群から西日本の縄文時代早期の状況を考えてみたい。

(a) 「原体条痕」について

ところで、早水台式土器に見られる原体条痕については、その名称が施文方法から適・不適の議論もあり、関野哲夫は裏面沈線（註1）、和田秀寿は高山寺式系土器について斜行沈線（註2）、角田徳幸は平行短線と称している（註3）。確かに、「原体条痕」は必ずしも押型文の原体を口縁部に直角に当て、擦ったとは考えられないものも多い。大分県内の遺跡出土の資料で見ると、関野が指摘するように、押型文の原体とは異なるさまざまな施文方法が観察される。「原体条痕」という名称は施文具と施文方法を想定したもので、それが不確かである以上は、土器面に残された状況そのままを呼称する「内面沈線」あるいは「平行短線」がふさわしいかもしれない。

それでは、その「原体条痕」の出現であるが、現在の縄文時代早期の土器編年で、その存在がひとつの決め手となっているのが早水台式土器である。しかし、早水台式土器に先行する稲荷山式土器の標識遺跡である杵築市稲荷山遺跡の報告を見ると（註4）、明確な原体条痕はないが、口唇部に刻目や刺突を施文したものが認められる。また、一部には口縁部内面に極短い原体条痕が認められる。さらに、押型文出現期と考えられている帯状施文の押型文から、最終期の手向山式土器までの押型文土器が出土した野津町菅無田遺跡（註5）でも、同様な土器が出土している。このような資料から、原体条痕の出現は、稲荷山式土器の口唇部の刻目→口縁内面端の連続刺突→口縁内面端の短い連続沈線→原体条痕とたどることが想定できる。こうして、九州地方で早水台式土器、瀬戸内地方で黄島式土器と呼ばれる土器型式が誕生する。

(b) 無文土器について

一方、森の木遺跡出土土器の約85%を占めるのは無文土器である。九州の押型文の出現以前は、大分県九重町二日市洞穴で明らかにされたように、丸底の条痕文土器である。この条痕文土器が、器面の撫で調整で条痕が消失し、無文化する。宇佐市中原遺跡では、底部に尖底化の胎動が見られ、器面は一部に条痕が見られるものの、撫で調整が行われた土器が竪穴遺構からまとまって出土し、こうしたなかに1点、山形の帯状になる押型文土器が出土している。（註6）。

以後、大分県内での縄文時代早期の無文土器の変遷は、押型文の出土量の増加に従い、減少する。臼杵市東台遺跡では、山形文の帯状施文土器に伴い、90%以上の無文土器が出土している（註7）。次に編年される稲荷山遺跡では、山形文がやや多く、楕円文が少ないが、無文土器は約75%を占める。同様に早水台遺跡（註8）では最下層の第1層は稲荷山遺跡とほぼ同じ傾向であるが、上層になるほど山形文が多く、それに代わって無文土器が減少し、最上層では、約60%である。そして、早水台式土器以降は、急激に減少し、下菅生B式土器・田村式土器・ヤトコロ式土器が出土する竹田市下菅生B遺跡で無文土器の占める割合は、約25%である。

一方、瀬戸内地方から近畿地方にかけての、無文土器の展開は、九州のそれとは異なる。まず、ネガティブ押型文・黄島式土器・高山寺式土器を層位的に出土した島根県堀田上遺跡（註10）では、無文厚手は「堀田上遺跡では僅かに1点が確認されたのみである。山陰側の早期の遺跡では無文土器があまりしられていない……」と述べられ、その存在は希薄である。しかし、瀬戸内沿岸について河瀬正利は、「瀬戸内地域では、黄島系土器の後半には、無文厚手土器が分布するが、その分布は、中国山地帯までであり、いまのところ山陰地方では確認されていない。」（註11）と述べている。岡山県黄島貝塚（註12）や香川県井島大浦遺跡（註13）からは、黄島式土器と一緒に、九州地方で見られる器形の無文土器がまとまって出土し、報告されている。そして、近畿地方で、無文土器が見られるようになるのは、高山寺式土器以降と言われている。

(c) 九州系押型文土器の拡大

以上のように、九州の押型文土器製作の中で誕生した原体条痕、九州で押型文土器と共伴する在地の無文土器は、早水台式土器以後、瀬戸内地方を中心に分布を拡大する傾向が認められる。

すなわち、原体条痕を持つ土器は、九州では早水台式土器から下菅生B式土器となり、長大な原体条痕をもつ田村式土器に変貌する。そして、瀬戸内地方では、黄島式土器から高山寺式土器へと変遷する。このうち、黄島式土器は、原体条痕の存在や、河瀬が指摘するように無文土器が伴うことなど、九州的な様相が色濃く見られる。また、田村式土器については、この土器設定以前から、西日本を中心に分布する高山寺式土器として、同類の土器が分布することはすでに知られていた。この広域に分布する土器型式の背景として、それ以前のも早水台式土器に見られる九州系押型文土器の拡大があると言える。そして、田村・高山寺式土器の広域分布圏を背景として、押型文土器の最終型式である、九州の手向山式土器、瀬戸内から近畿の穂谷式土器、中部地方の相木式土器と類似する土器の出現が考えられる。

(坂本嘉弘)

《引用文献》

- (1) 関野哲夫 1998「高山寺式の編年—その細分と西日本地域との関係について—」『先史考古学研究』 第1号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- (2) 和田秀寿 1988「縄文早期高山寺式土器の成立過程と細分編年」『古代学研究』第117号
- (3) 角田徳幸編 1991「主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—堀田上・今佐屋山・米屋山遺跡の調査」島根県教育委員会
- (4) 橘 昌信編 1970「稲荷山遺跡調査報告書」大分県文化財調査報告書第18輯 大分県教育委員会
- (5) 坂本嘉弘 1986「菅無田遺跡」野津町教育委員会
- (6) 小倉正五・佐藤良二郎 1991「一般国道387号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—山ノ下横穴墓群・中原遺跡」宇佐市教育委員会
- (7) 清水宗昭ほか 1974「東台遺跡」臼杵市教育委員会
- (8) 八幡一郎・賀川光夫 1955「早見台」大分県文化財調査報告書第3輯 大分県教育委員会
- (9) 高橋 徹・後藤一重 1986「下菅生B遺跡」「上菅生B遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡』竹田市教育委員会
- (10) (3) に同じ
- (11) 河瀬正利 1986「山陰地方の縄文早期・前期の様相」『参院考古学の諸問題』
- (12) 河瀬正利 1981「岡山県黄島貝塚出土の遺物について」『帝釈遺跡群発掘調査室年報』広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室
- (13) 間壁忠彦 1981「香川県直島町井島浦の押型文土器」『倉敷考古館研究集報』第16号 倉敷考古館

◎森の木遺跡の石器について

森の木遺跡の発掘調査では、調査面積に比して豊富な石器が出土しており、縄文早期前半の石器組成を観察する上で良好な資料を得ることができた。なかでも特徴づけられるのは、硬質の砂岩を利用した礫器類と大型の剥片石器の存在である。それは、石器全体の中で量的にも高い割合を占める。これは、その素材が遺跡の前面を流れる大越川の河床に産する礫の中に見いだされるものであり、そうした地理的条件に負うところが大きいものと思われる。これに対して、より緻密な石材を素材とする中・小型の剥片石器類は、スクレイパー（削器・搔器）

類が多く、石鏃が少ないことが指摘される。これらの素材はこの大越川河床では見い出せないホルンフェルス、チャート、頁岩等であり、他地域から搬入されたものである。

森の木遺跡の石器組成の大きな前提条件としてこうした石器素材の供給の問題が大きいものとする。以下、石器群の特徴と問題についていくつか触れてみたい。

1. 礫器について

礫器は、片刃と両刃のものがあり、片刃礫器（註1）の方が量的に多い。片刃礫器については、その加工の形態によって4種類に分けることができる。なかでも森の木遺跡の礫器を特徴づけるものとして、礫を分割後に加工するもの（I-B、I-C類）、さらに、刃部の両側に加工を施して、形と重量を調整したもの（I-D類）に細別が可能である（註2）。とくにI-B類については、いずれも重量が1.4kgを越えるもので、一つは3kgを越えるものである。I-B類については、刃部以外の部位に調整加工を有するところからも、これが完成度の高いものと見られる。そしてその刃部がいずれも60°前後と片刃礫器の中でも小さい鋭角であることも、その機能が他の礫器と異なることを示唆するものである。その重量からして、おそらく樹木の伐採に用いられたのではないかと推定される。これについては、同じく縄文早期の三重県鴻ノ木遺跡の礫器についての考察が参考になった（註3）。鴻ノ木遺跡では、礫器のいくつかを伐開具と考え、さらに、集石炉との関係で薪材獲得のものとして具体的に想定している。森の木遺跡では、3基の集石遺構から5点の片刃石器が出土しており、きわめて示唆的である。

両刃礫器についても、その加工形態によって4つに分類することができた（註4）。II-A、II-B、II-C類については、片刃礫器と基本的には加工、機能ともに大きく異なるものではないと思われる（註5）。ただ、II-C類の大型礫器の一つは、先端部に顕著な磨耗痕が観察された。その部位の磨耗状況からむしろ対象が軟らかいものと想定された。それは形態から伐開具というよりも、樹脂採取にかかわるものではないかと思いを巡らした。

II-D類については、全く形態が別種のものと考えられる。これらは、彫器様礫器と称してもよいもので、その刃部の形成工程が特殊なものである。すなわち、旧石器時代の彫器の刃部形成に近い技術によってなされたものである。その一つは、礫を分割後、身狭の一端の斜め方向に大きく長い剥離面を作り、その面から反対方向に数回の細かい剥離角55°という鋭い刃部を作り出している。このII-D類については、ここでも類例が少なく、また他の遺跡での例を見ていないので、今後の検討課題としておきたい。

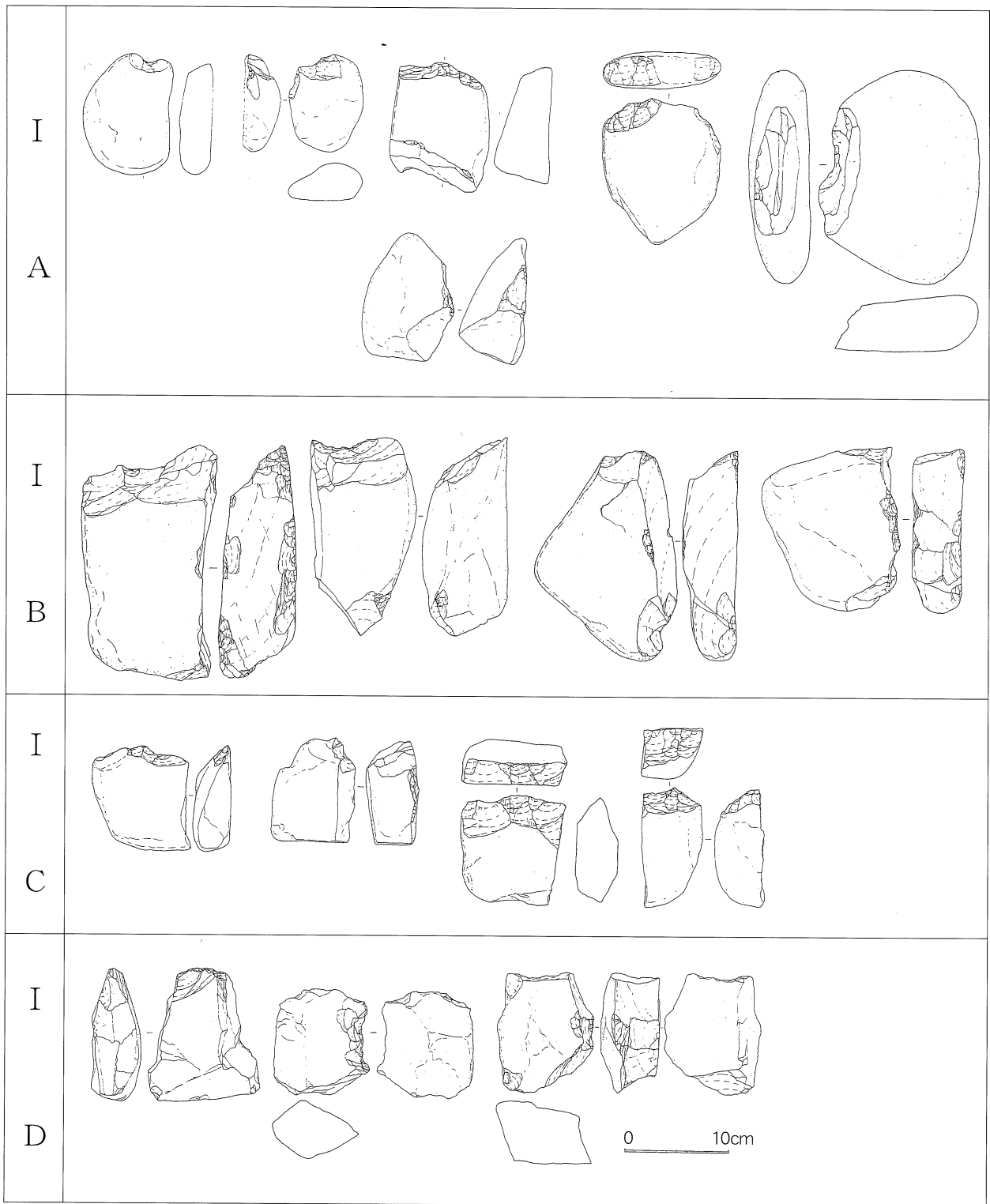
2. 大型（粗製）剥片石器について

森の木遺跡では、礫器と同じ硬質の砂岩製の大型の剥片石器が比較的多く出土している。これらは、一見して礫器に近い形態をもつものであるが、重量で500gを超えるものはなく、また剥離加工も多様である。さらに、良質の緻密な砂岩を用いたものは、細かい2次加工を施したのもあり、スクレイパー類としては幅広い用途が想定される。その量と形態の多様性から、おそらく礫器と中・小型のスクレイパー類の機能を補完するものであったと思われる。

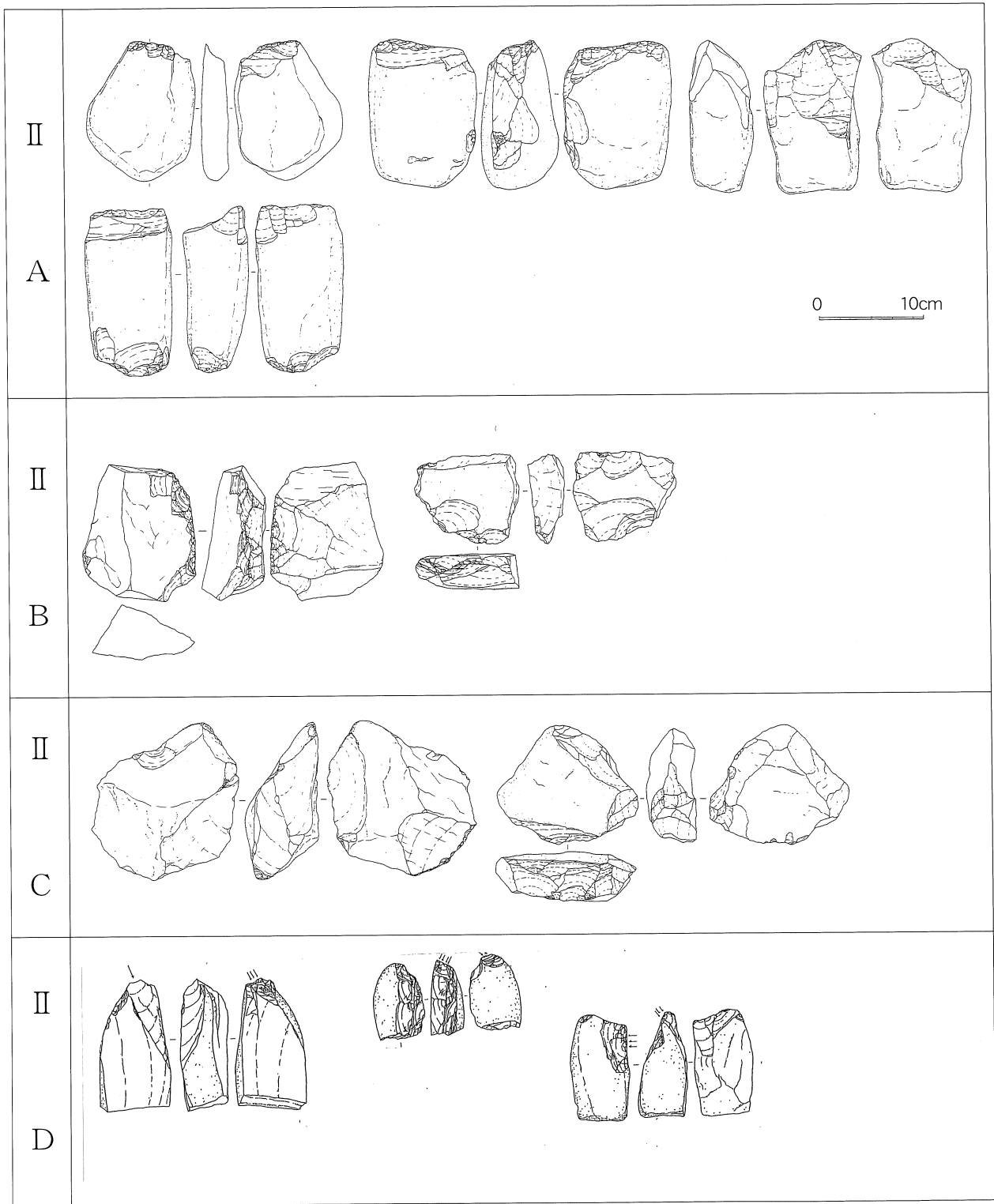
なお、これらの母材となる大型の石核の存在は1点しか検出されていない（註6）。中・小型の石核が比較的多く出土しているところから、持ち込んでの剥片剥離作業（フレーキング）は少なく、原石産出地での素材剥離が行われたのではないかと見られる。（註7）。

3. 中・小型の剥片石器類と石核について

礫器等の素材となった砂岩に比してより緻密な石材であるホルンフェルス、チャート、頁岩等を用いて作られ



第50図 片刃礫器の分類



第51図 両刃礫器の分類

た中・小型の剥片石器類とその母材である石核類である。剥片石器類の中ではスクレイパー類の比率が高いことがまず指摘できる。そして、その割りには、定形化された石器類が少なく、剥片を少し加工したスクレイパー類の生産度が高いことを示す。要するに石核からの多くの剥片剥離が行われた割りには、定形化された石器類が少なく、石器製作に偏りがみられるとあってよい。ここでは、石鏃のような定形化した石器類が少なく、不定形なスクレイパー類が多い。その中の削器類にしても片面加工のものが多く、またノッチ状の加工をもつものも目立つ。

石材に関していえば、これらの石材は大越川の河床には産しないものであり、他地域から搬入されたものである。これらの剥片石器類は良質のものが少なく、また石核類も残核に近いものが多い。さらに二次利用の石核も多いところからも、森の木遺跡では貴重な石材であったことを物語るものと思われる。はっきり産地が同定できるものは、石鏃に利用された姫島産黒曜石があるほかは、チャートについてはおそらく番匠川本流の河床、ホルンフェルスについては大野川の河床の産と推定されるが確証はない。

最後に剥片の剥離技術についていえば、剥片及び削器類に縦長の整ったものが多く見られ、あるいは、打面の調整技法の存在等から、そこに旧石器時代の伝統を強く感じとることができる。また、小型の剥片石器の中にも彫器様石器が見られたことは注目してよい。県内で、縄文早期の彫器的な石器は、以前臼杵市東台遺跡で報告されており、それが例外でなかったことを示してくれる（註8）。東台遺跡の彫器（彫器様石器）は、2点出土しており、1点は姫島産ガラス質安山岩の剥片を利用し、2ヶ所に槌状剥離をもつもの。他はチャートを素材とし、交互に打面とした槌状剥離をもつものである。

（清水宗昭）

<註1> 縄文時代の礫器の研究に関しては、賀川光夫氏の先駆的な業績がある。氏は、その形態から、とかく旧石器時代の古い段階の所産のみられがちなこの種の石器について、その出土層位、共存関係等によって、縄文早期に特徴的な石器の一つであることを明確に位置付け、この分野の研究の大きな指針を示した。（賀川光夫「礫器の下限」『古代文化』21-7 古代学協会1969、賀川光夫「縄文早期の礫器」『古代文化』21-12 古代学協会1969）

<註2> 片刃礫器については、旧石器時代を主体とするものであるが、織笠明氏の精緻な研究（「日本列島における片刃礫器と丹生1-B地区第2群石器の位置付け」参考文献1所収）があり、全国出土の片刃礫器の集成と分析を行なっている。この中で、片刃礫器の特徴として、「片刃礫器はその一部が刃部として利用されるが……分割礫を用いる場合でも片側に礫面が広がっている。そして、それらは円礫か垂円礫、あるいは垂角礫であることが通例である。それゆえ片刃礫器の正面形は概略方形か半円形に近い形になる。刃縁はほぼ直線か軽い円弧状を呈する。」と的確な観察がなされている。森の木遺跡の片刃礫器を考察する上で、そのままあてはめられるものである。

<註3> 大下明ほか編「鴻ノ木遺跡（下層編）」三重県埋蔵文化財センター1998によれば、ここでは442点という大量の礫器が出土しており、極端に片刃礫器が多いこと、その機能については、河川漁撈と直接結びつくものではなく、そのいくつかを伐開具と想定できること、なかでも、集石との関係で、薪材獲得の機能が考えられるものとしている。

<註4> 押型文土器に伴う礫器の分類については、橘昌信氏の論考（「押型文土器文化の礫器」『古代文化』22-11 古代学協会1970）があり、その中で礫石器と礫核石器に分類しているが、これは、大下明・久保

勝正氏が指摘する（註2文献）ように、本遺跡出土の礫器についてもそぐわないものである。ここでも片刃礫器・両刃礫器の二大分類をとり、それを各々4つに細分する方法をとった。

<註5> 両刃礫器について織笠氏は前出の論考の中で、(1) 両刃礫器は剥離面と打面を交互に用いる。(2) 両刃礫器は日本列島ではほとんど石核とされている。もちろん、これは旧石器文化（先土器文化）主体の両刃礫器の分析の結果であり、直接比較できない本遺跡の両刃礫器の機能については、本質的には片刃礫器と共通するものと考えてよい。その刃角については、片刃礫器が平均71°、両刃礫器が67°と少し差がある。それは加工がもう片面に及んだ分、より小さい角度になったのであろう。そして両刃礫器の大部分はむしろ片刃礫器の刃部再生の結果と考えるのが自然と思われる。

<註6> 鈴木次郎氏は細石刃文化に伴う礫器についての論考（「第Ⅱ文化層」『栗原中丸遺跡-県立栗原高等学校建設にともなう調査-』神奈川県立埋蔵文化センター調査報告3 1984）の中で、礫器44点の観察を通して礫器の刃部縁辺の磨耗例がすくないことから、これは刃部再生が頻繁に行われた結果であり、この遺跡では石核ではなく道具としての礫器として評価するものとしている。

礫器と礫面を多く残す大型の石核とは判別に苦しむことがあるが、森の木遺跡の大型石核については、形状が不定形、打面が平坦な自然面、そして何よりも同一石材の大型の剥片石器が多数出土していることが、その決め手になるものと思われる。

<註7> 素材を原石採取地で作ることに关していえば、礫器のI-B、I-C、I-B類等の分割礫を素材とするものも、その分割作業は現地で行われた可能性が高い。

<註8> 清水宗昭編『東台遺跡』白杵市教育委員会 1974

《参考文献》

- (1) 鈴木忠司編 1992「大分県丹生遺跡群の研究」古代学研究所研究報告第3輯 古代学協会
- (2) 高橋信武編 1993「宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書」大分県教育委員会
- (3) 綿貫俊一編 1995「古城山-大分南バイパス予定地内遺跡」大分県教育委員会
- (4) 甲斐寿義ほか編 1999「スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書 一方平Ⅱ遺跡・一方平Ⅲ遺跡・一方平Ⅳ遺跡」大分県教育委員会



B区調査風景



B区調査風景



4層上面で検出した遺構



A7・B6・B7区集石出土状態



E6区 4層上面で検出した柱穴



地元小学生の見学



B区中央付近の土層断面



B7区集石



B区調査風景



D5区遺構出土状態



E 4 区周辺



D 6 区周辺



D6・D7区出土状態



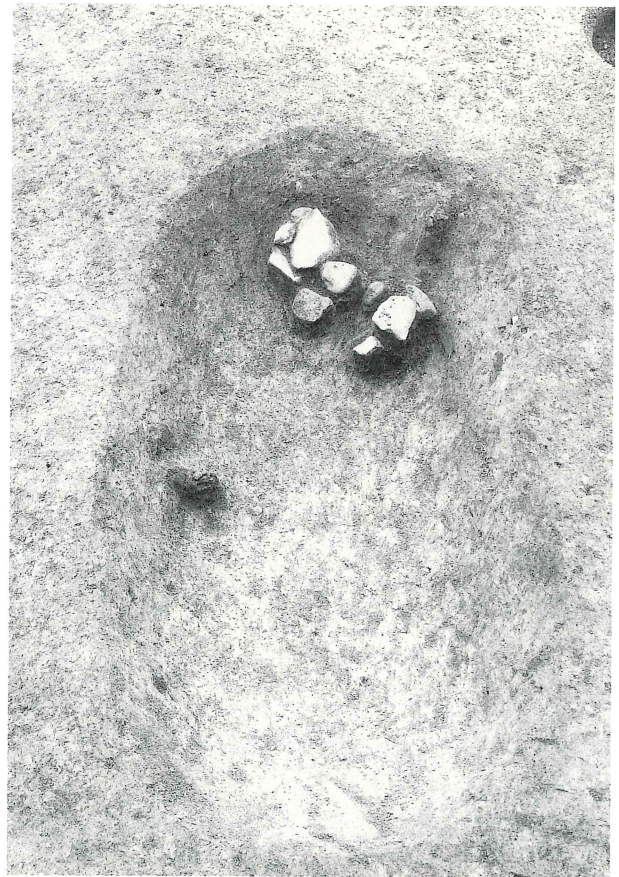
D6区周辺



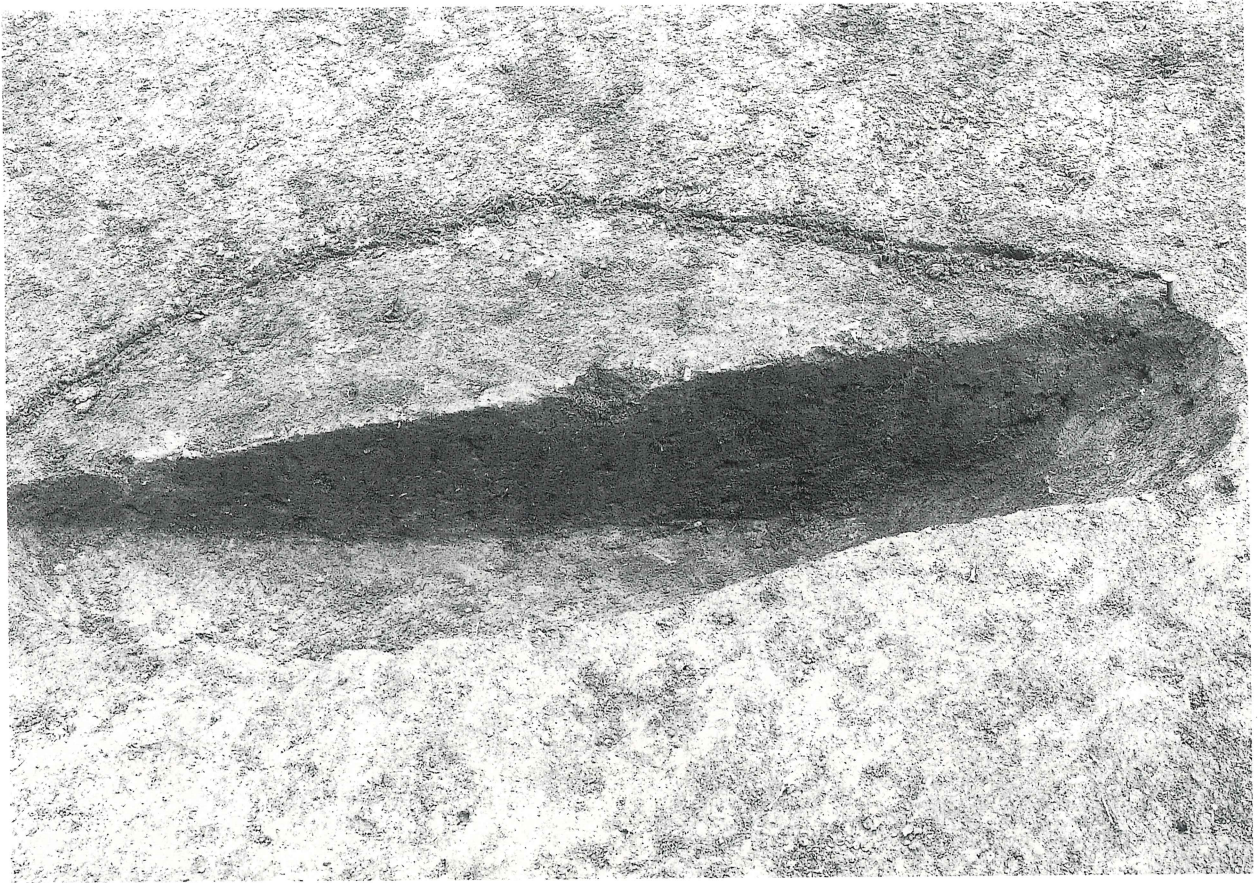
A区検出の柱穴類



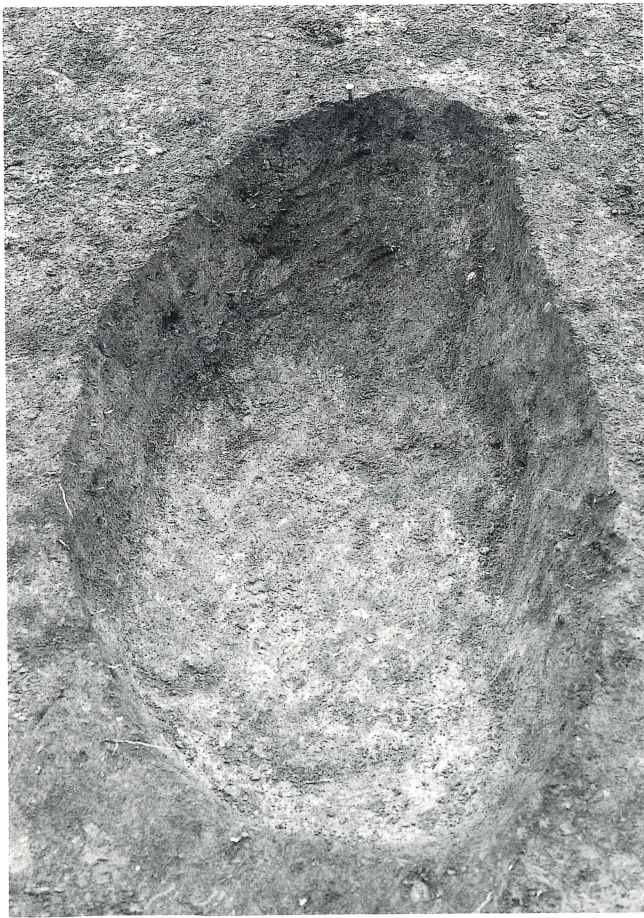
D5区遺構出土状態



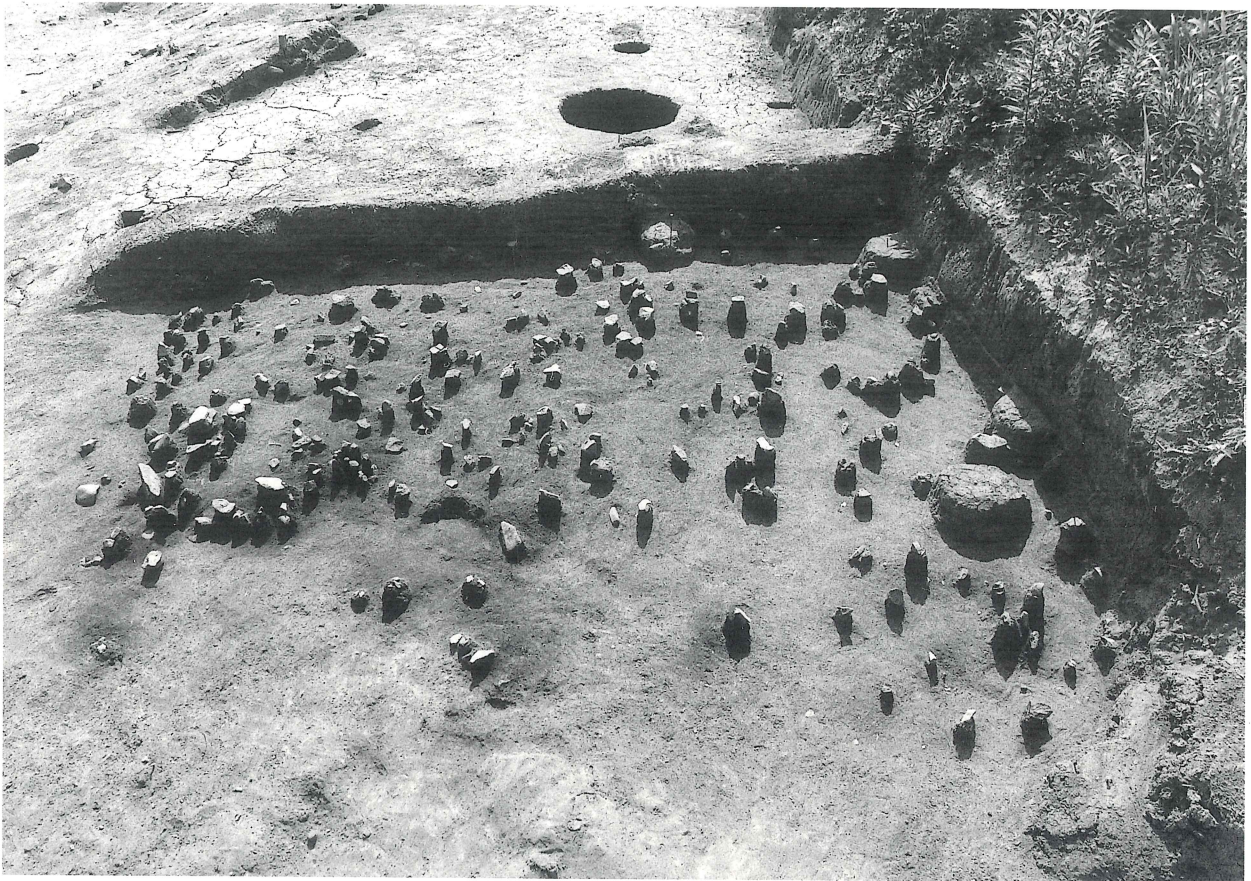
D6区1号土坑



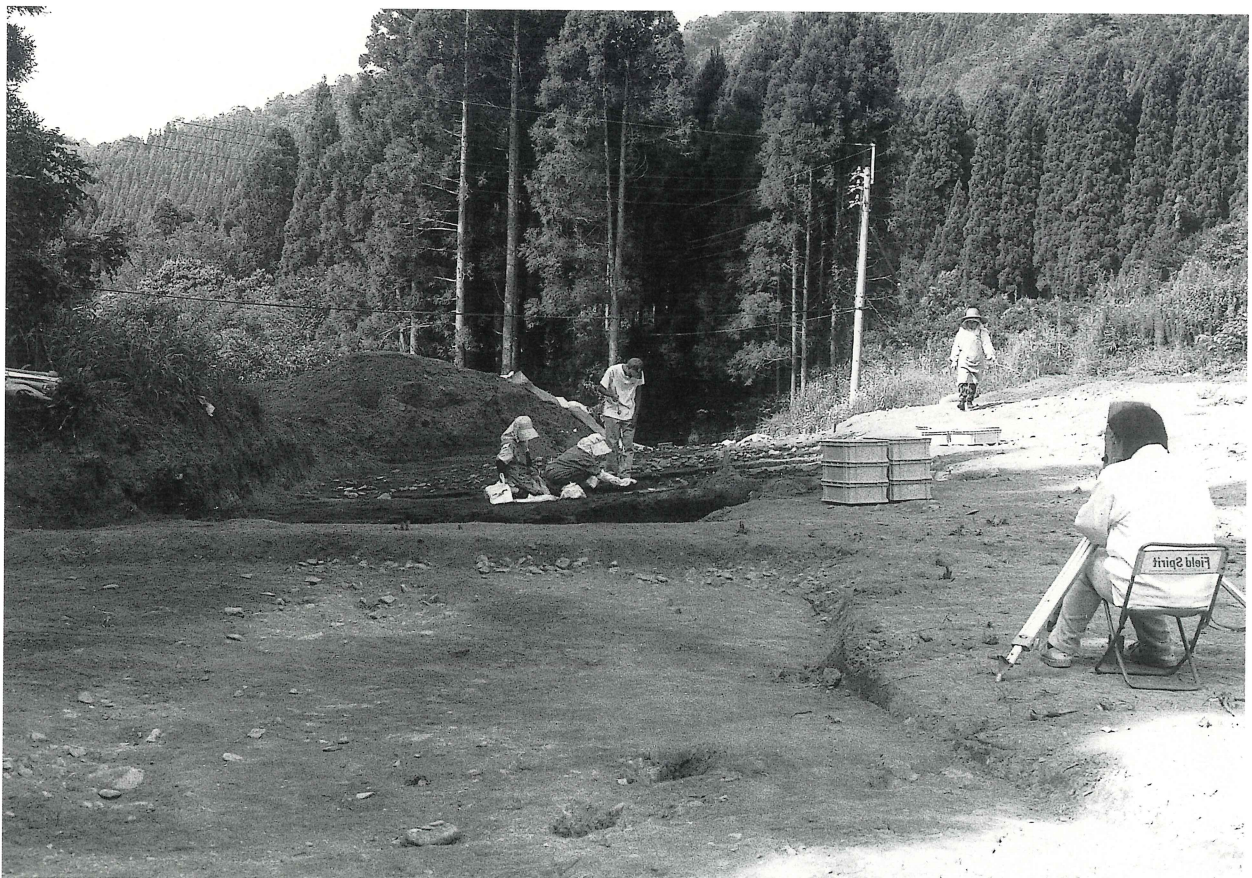
SK 2



SK 2 完掘状況



E4区



調査風景



B7区焼土 pit



2号・3号集石



2号・3号集石



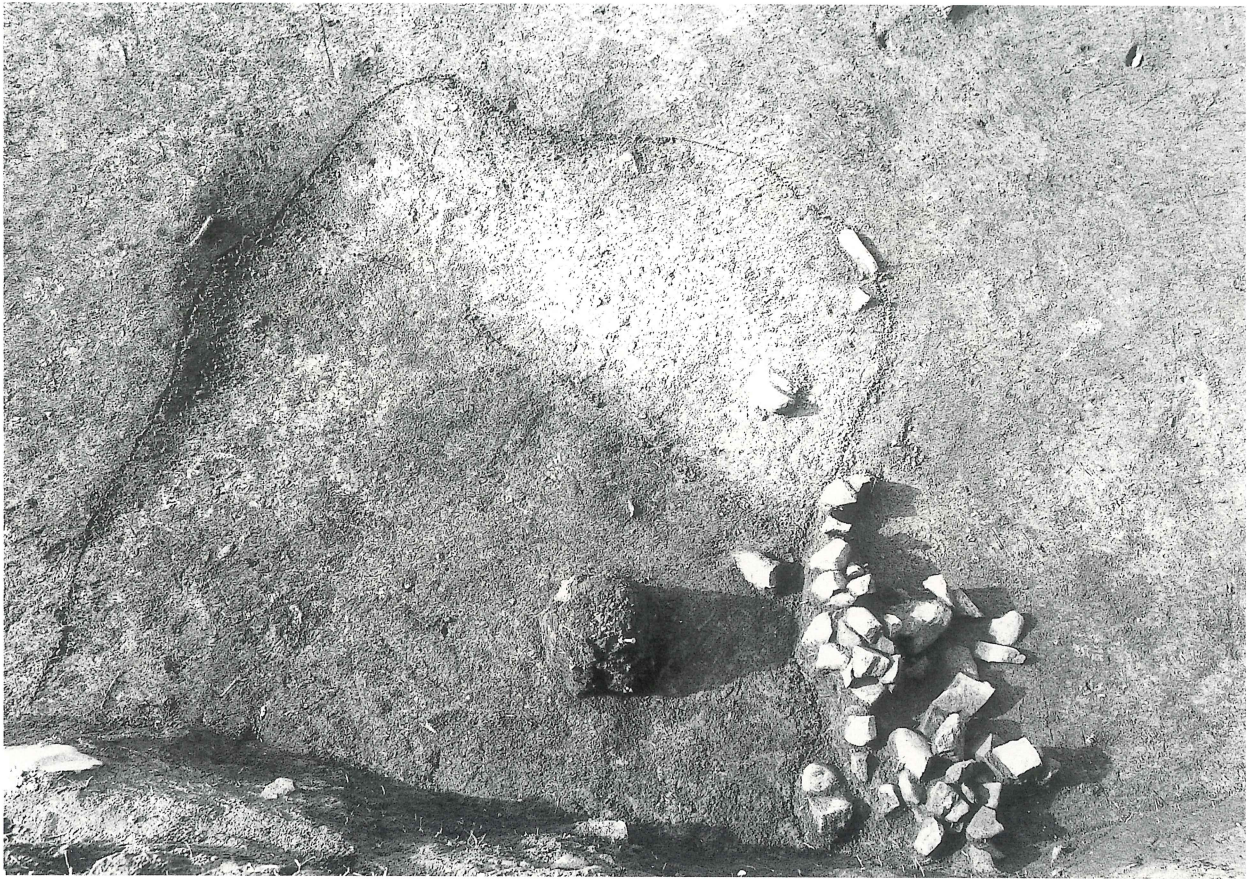
2号・3号集石



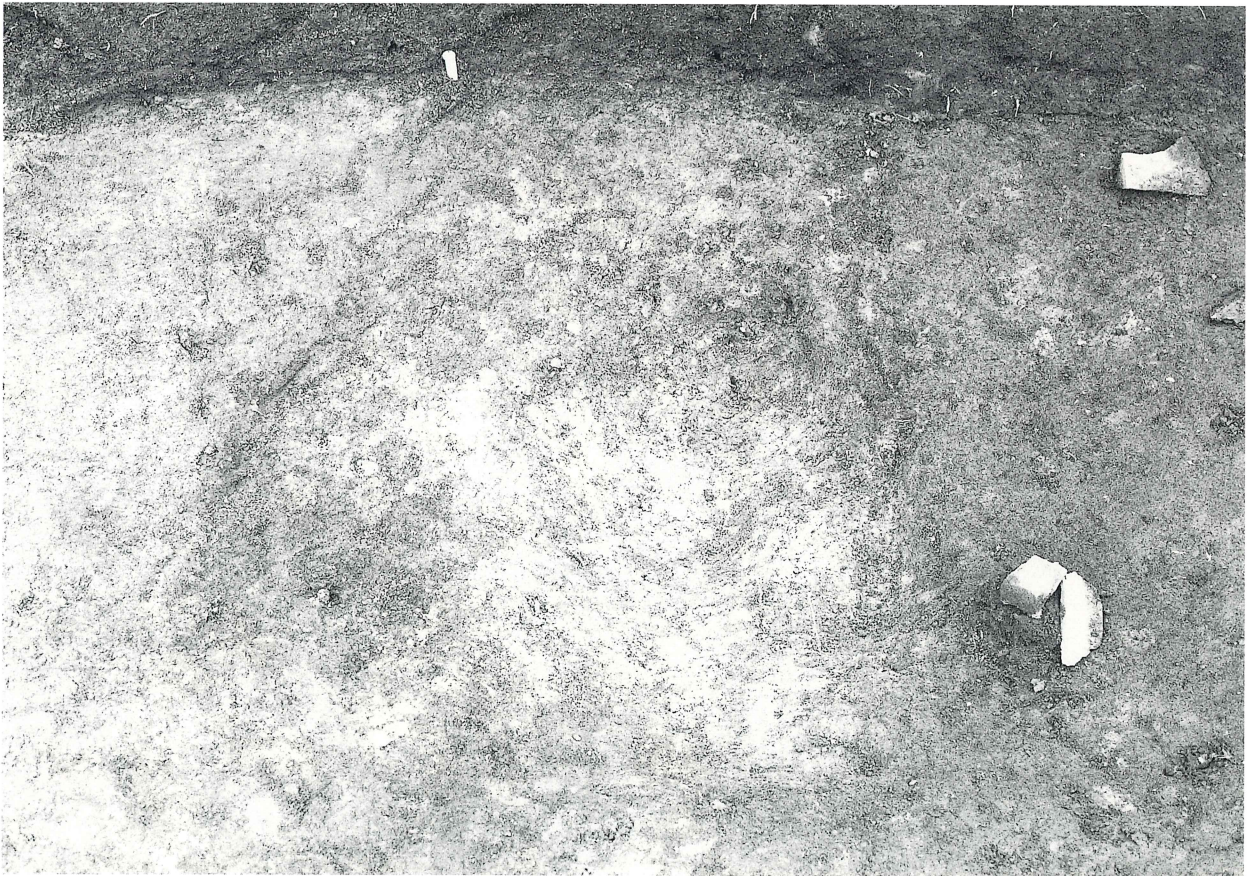
4号集石 1



4号集石 2



4号集石 3



4号集石炉穴



6号集石



6号集石



7号集石



7号集石



7号集石



7号集石



8号集石



9号集石 1



9号集石2



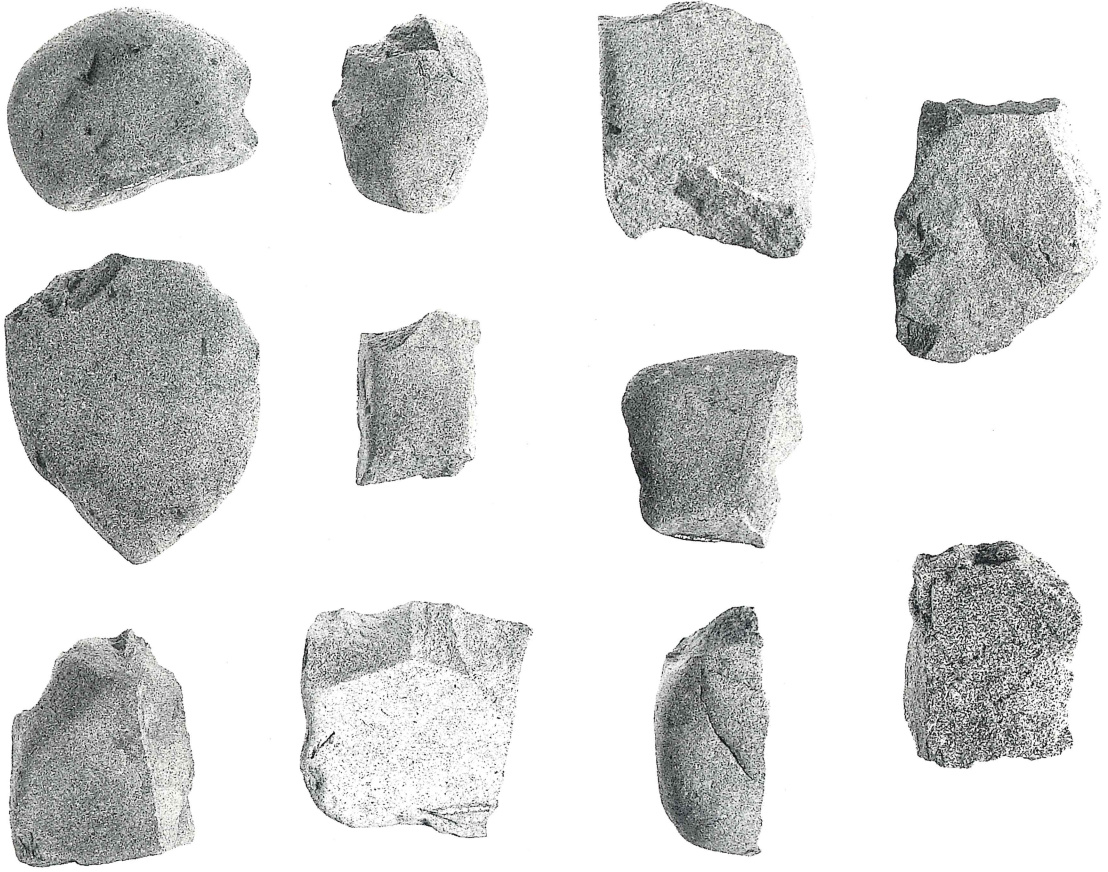
10・11号集石



10号集石



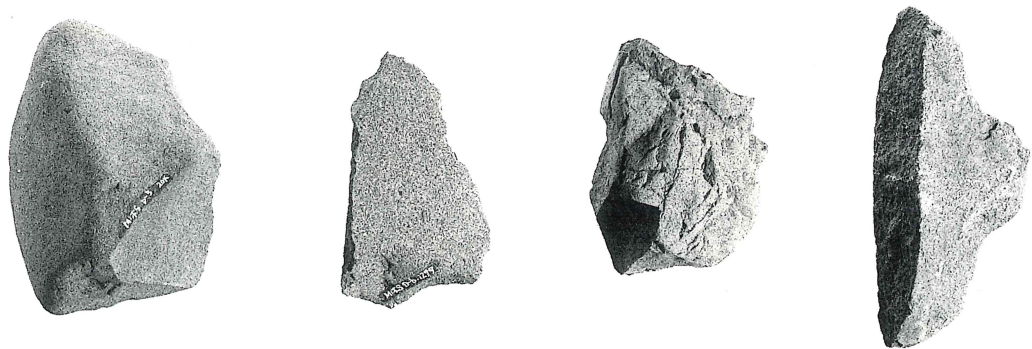
11号集石



片刃礫器（その1）



片刃礫器（その2）

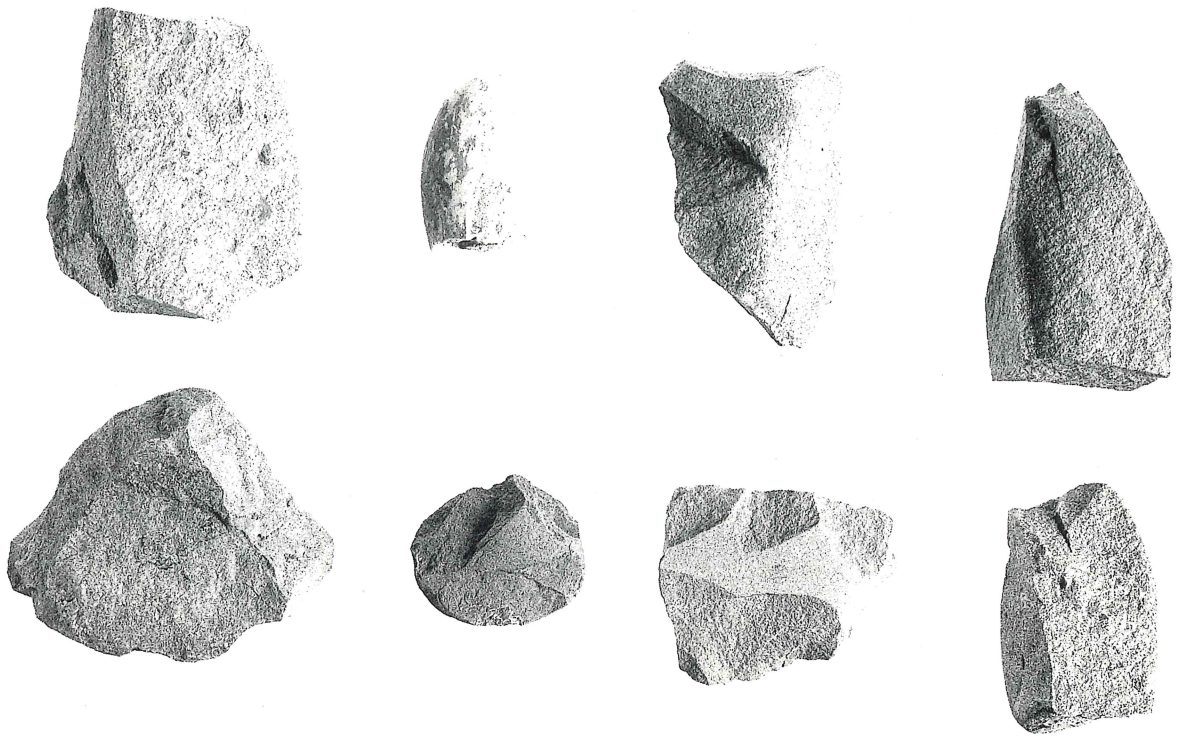




片刃礫器 (その3)



両刃礫器 (その1)



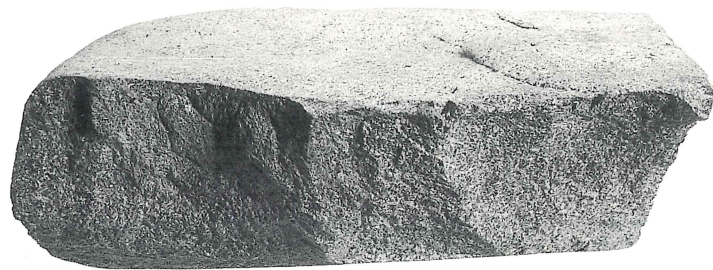
両刃礫器 (その2)



大型石核・磨製石斧・敲石・磨石



第31図-12



片刃礫器

第30図-8



第30図-10



両刃礫器

第33図-1

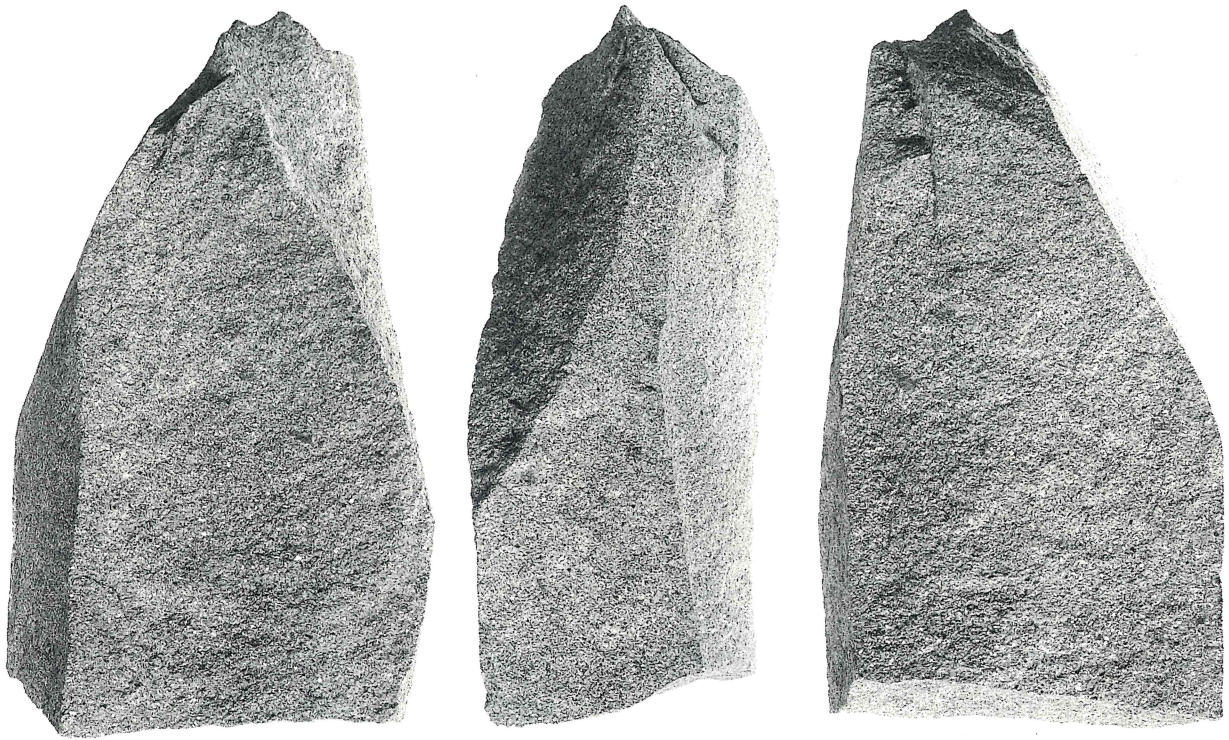


第33図-2



両刃礫器

第33図-6



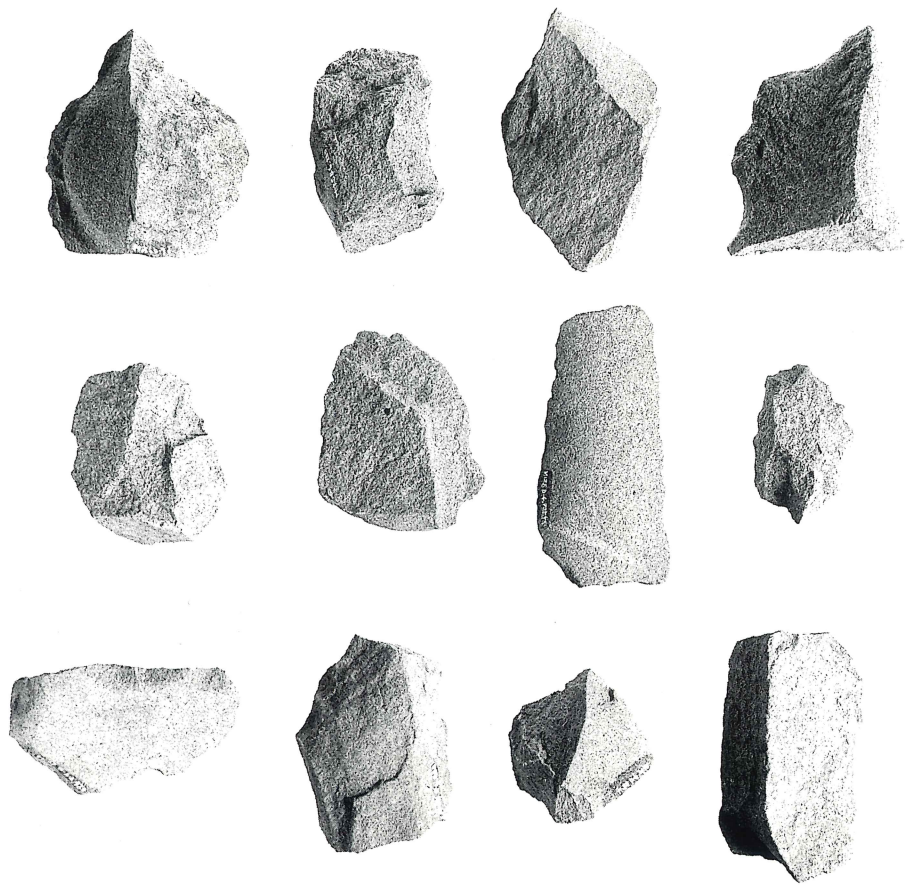
彫器様礫器

第34図-10

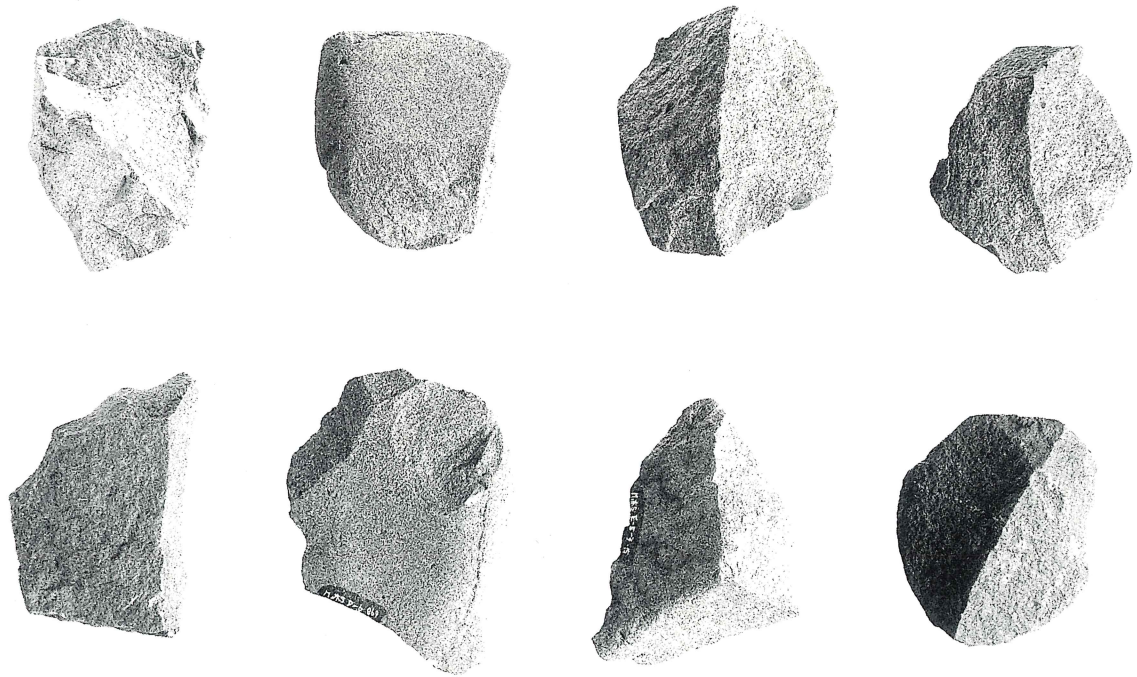


ハンマーストーン

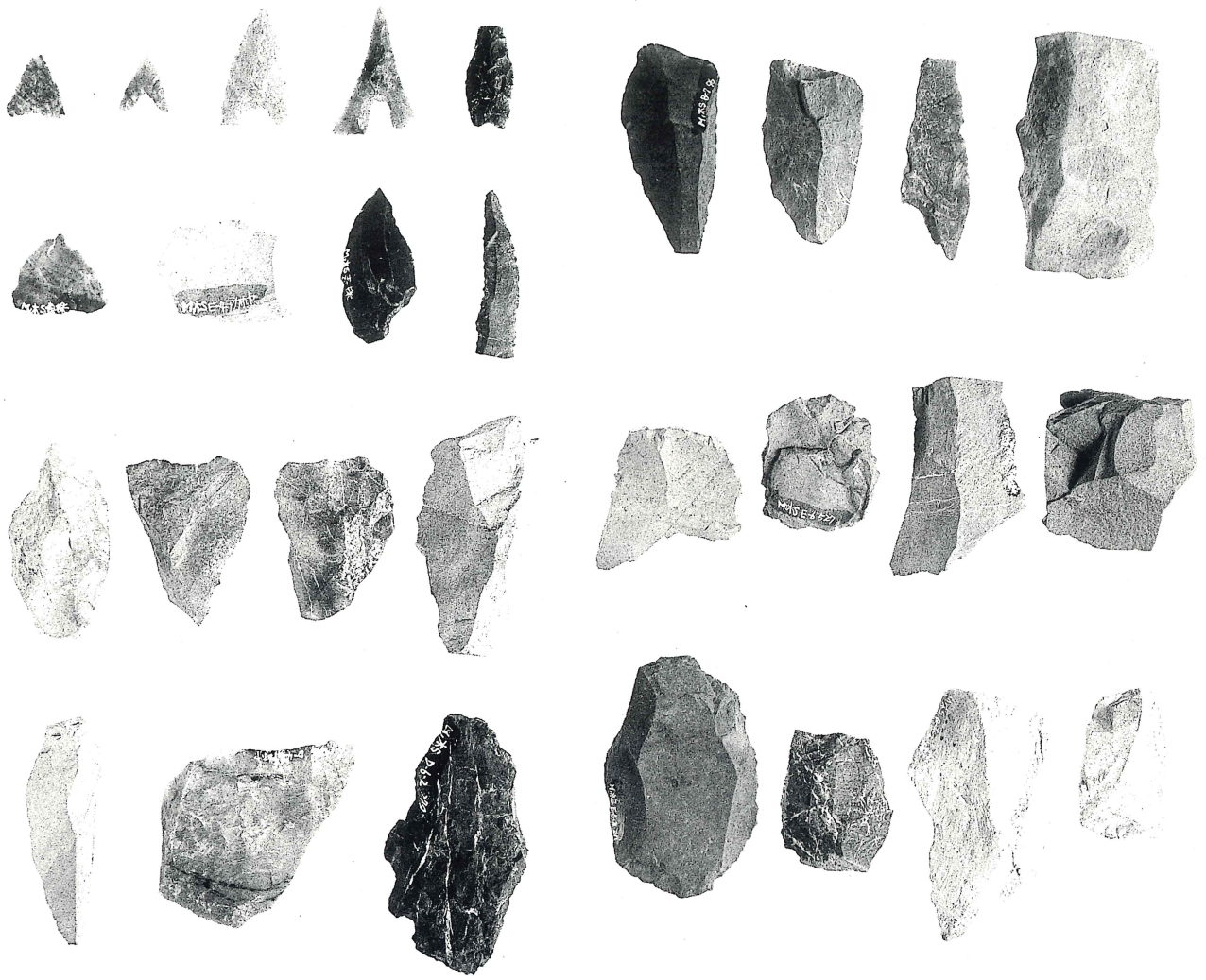
第35図-6



大型（粗製）剥片石器（その1）

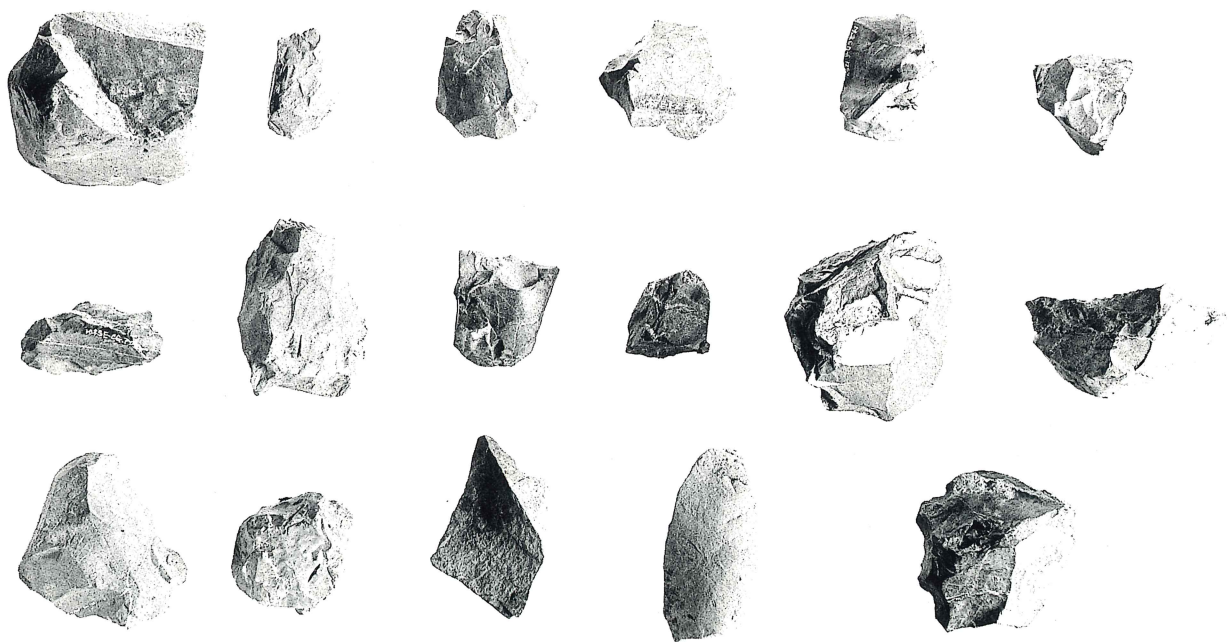


大型（粗製）剥片石器（その2）



剥片石器 (その1)

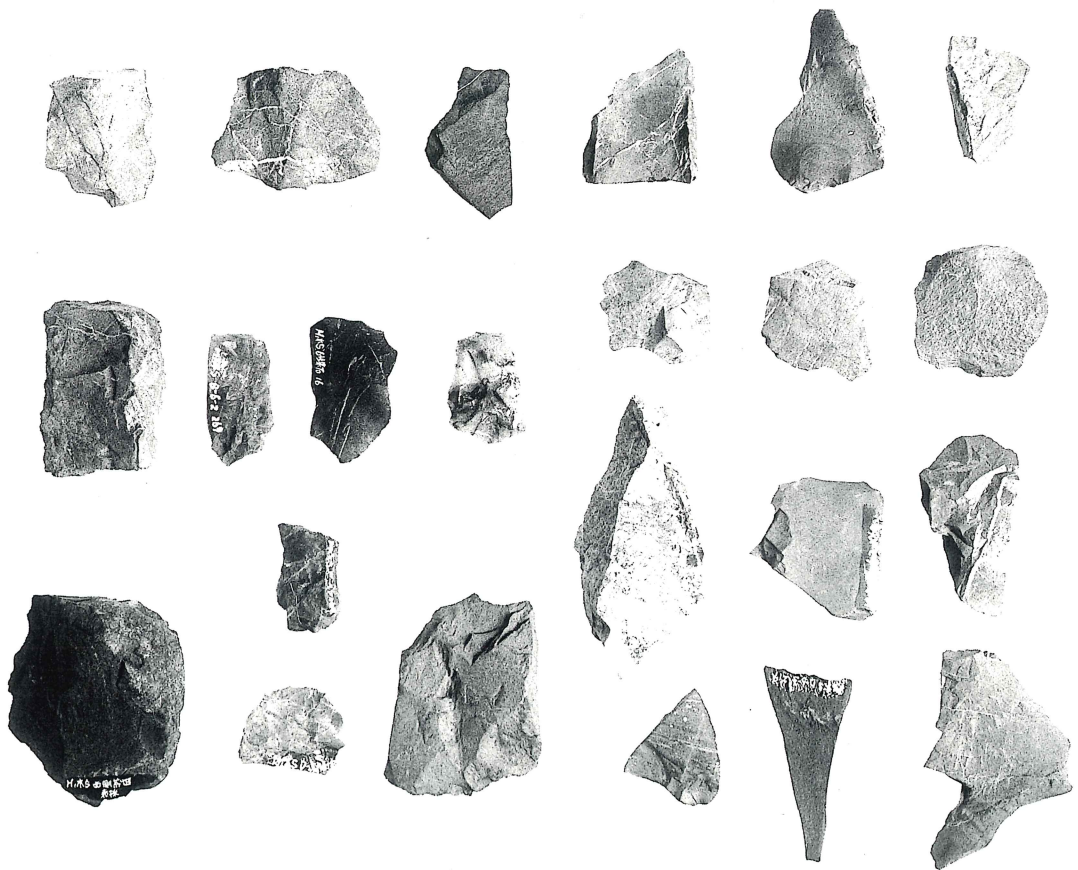
剥片石器 (その2)



石核



削器類 (表)



削器類 (裏)

報 告 書 抄 録

ふりがな	もりのきいせき							
書名	森の木遺跡							
副書名	県道赤木吹原佐伯線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大分県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第109輯							
編著者名	高橋信武編、清水宗昭・坂本嘉弘・高橋信武執筆							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号 〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地 大分県文化財資料室							
発行年月日	2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯 ° ′ ″	東 緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
森の木遺跡	佐伯市大字長谷字森の木	44205	新発見	32°54'15"	131°51'45"	1998.07.01 ～ 1998.10.27	926㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
森の木遺跡		縄文時代早期	集石11基 土坑4基		押型文土器 礫器			

大分県文化財調査報告書 第109輯

森の木遺跡

県道赤木吹原佐伯線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月31日

編集 大分県教育委員会

発行 大分県教育委員会

〒870-0021

大分市府内町3丁目10番1号

TEL 0975(36)1111

印刷 (有)印刷 良栄堂
